

# 神戸 YWCA 夜回り準備会 つれづれ

(活動報告書 Vol.6)



# はじめに

野々村 耀

夜回り準備会【仮】という名前について、何時まで準備会なんだと聞かれることがあります。仮の名前を「準備会【仮】」としたのは、夜回るだけでなく、夜回り（や昼回り）で出会った人が困っていることがあれば、その解決のためにも努力したい。夜回りが活動の全体ではないということをうまく表せる名前が見つからないので「準備会【仮】」としてきました。今年の報告書を作っていて、これまで以上に＜夜回り＞で完結しないということを感じています。

## 変化

戦争と日本人（加藤陽子・佐高信）という本に「経済が世界規模になり、世界の人口の20%の国々が残り80%の国々の資源と富を搾取することで利益を上げるという仕組みがうまく行かなくなった。そこで国内で20%の金持ち層が残り80%の貧しい層を搾取するという状況になった。民族・人種の違う目の前にいない人を搾取するのと、目の前にいる人を搾取するのでは、緊張の度合いが違う」という意味の指摘がありました。野宿している人をとりまく状況もこうした変化と無関係ではおれない。過度の緊張が不安を煽り、不審なものを排除し、存在させなくしようとするとも関連がありそうです。小泉・竹中の規制緩和政策から、リストラ旋風があって、野宿する人が一気に増えた後、「ホームレス自立支援特措法」ができ、路上や公共の場所から野宿する人を見えなくするという政策によって、野宿している人は減ったように見えます。

しかし、誰もが安心して住み、生活できるという状況になったとは思えず、むしろ息苦しさは深まったように思えます。

以前は、夜回りをして、声をかけ、住むところを確保して一件落着、一安心、という感じだったのですが、最近は、部屋を確保し、生活保護を受けたとしても、そのあと、孤立した生活の中で精神を病んだり、生活を維持することも困難になる人が増えて

います。これから、一人暮らしの人が孤立しながら高齢になっていく中で、周囲と協調することも困難になるという問題が深刻化するでしょう。

また、親と同居しているが、失業や、不安感のために、その生活を続けるのも困難だという人からの相談があったりします。そういう人が、YWCAの夜回り準備会という、主として野宿している人を支援しているグループに相談されるということは、その人が自分は野宿と遠くないところにいると感じているからでしょう。非正規雇用による不安、貧困が片方にあり、他方には、正規雇用から脱落しないためには、自分の時間も健康も奪われるような労働環境があり（夜回りのメンバーも、仕事に就くと、なかなか活動に参加できなくなります）、以前日雇い労働をしていた人が仕事がなかったり、働けなくなって野宿になったのとは違った様相が現れてきたように思われます。

## 変わらない

もう一方で、変わらないという問題もあります。ピンペアという人の書いた「民衆が語る貧困大国アメリカ」という本の副題は「不自由で不平等な福祉小国の歴史」というものです。歴史の本なのに、時系列の記述でない。それはアメリカで福祉が発展しなかった、変わらなかったということを取らなければならないのです。

日本においても、細かい変化は色々あるが、貧しい人へのまなざしや、無関心、偏見は変わっていないといえます。

これまでの夜回りではすまなくなってきたと言う感じと、これまでの問題も未解決だという戸惑いが、今回の報告書のテーマではないかと思えます。私たち自身もうまく捕らえられないままに、感じるところを書いてみたというのが正直なところではあります。

去年は省略した、人数の推移のデータも今年は掲載しました。また、活動も人間の関係です。その中で様々なハラスメントがあるとしたら、活動そのものが信じられないものになります。その意味で、継続して、このテーマにも紙面を取りました。

# 目次

1.	はじめに.....	野々村耀	1
2.	野宿している人と私たちをとりまく状況		
2-1.	境目が見えなくなっている .....	臺信一郎	3
2-2.	夜回りにまつわる数字.....	山村麻里子	5
2-3.	神戸市と「ホームレス」対策 ～「野宿の人は福祉事務所で生活保護の申請はできません」～...	鍋谷美子	7
2-4.	夜回りって何? .....	佐野歩	9
2-5.	寄せ場交流会報告—神戸でのとりくみ—.....	鍋谷美子	11
2-6.	僕の部屋のように散らかった原稿 .....	野々村耀	17
2-7.	ビジュアル・いぢわる・インビジブル .....	井沼祐太・佐野歩・臺信一郎・中村祥規 鍋谷美子・野々村耀・山村麻里子	26
3.	参加者感想.....		33
	巻末付録：夜回り準備会年表 .....		39
	2009 年度会計報告、寄付・寄贈報告 .....		40

**【表紙解説】**：野宿している人の仕事として、多いものの一つにアルミ缶集めがある。しかしアルミ価格の下落で生活していくのが大変になって、生活保護を申請したひとも多い。それ自体、「働ける内は自分でやっていきたい」のエピソードだが、K さんはいつもかなりの量のアルミ缶を集めている。出会った頃は日雇い仕事をしていたが、仕事がなくなり、アルミ缶などを集めてしのいでいくようになっていた。奥には山のような缶！とにかく大量！なかなかここまで集められる人もいない。ここまで置いておける場所がある人も多くない。さらに現在各地で資源ゴミ回収条例が次々につくられている。それはアルミ缶を集める人を犯罪者化し、その収入で細々と暮らす人の、まさに生活を直撃する。

右は壁一面のビラ。K さんは、私たちの持っていくビラを壁に貼って、困って訪ねてくる人などへの情報掲示板としている。そういうつながりもあるのかと興味深く聞かせてもらっている。(なべたに画)

## 2 野宿している人と私たちをとりまく状況

### 2-1 境目が見えなくなっている

臺 信一郎

最近夜回り準備会の活動の中で、公園などで寝ている人に会って話をしていると実は家があるということがわかり、どうして外で寝ているのか疑問に思うことがある。また野宿をしていなくても、精神的な疾患のため被害妄想などがあり1人居宅で暮らすのが困難な人もいる。アルコール症でいろいろな問題を抱えていて、支援の難しい場合もある。「野宿している人」と「そうでない人」の境目（あるいは「野宿していたら大変」「家があったら大丈夫、安心」という区別）がはっきりしなくなっているように感じる。そのような人たちについていくつか例を挙げてみたい。

#### ある公園のベンチで寝ていた人

ある日の夜回りで、東屋の下にリュック一つで座っていたところを見かけて声をかけた。「いつも寝ているわけじゃないんですけど」と言っていたが、わたしたちの活動の話を通り聞いてくれた。そしてその次の夜回りで会ったときにいろいろ話した。仕事と住まいのことで困っているという話で、家族との関係は良いが事情があって帰りづらいとのことだった。家探しは仕事がないため難しいが、今の「家」には帰れるし、家族も保証人になってくれるので、そこまで切羽詰まっているわけではないらしい。洗濯、シャワーも自宅でしているとのことだった。「家」があるためか、荷物は少なかった。

市民相談にも行ったが、法律相談を勧められたそうなので、生活保護や施設のことについては教えてくれなかったらしい。仕事も条件に合うのを探している最中だということだった。年は「言えるような年ではない」と言われた。仕事がないからなのか、その真意はわからないけれど、自分を卑下する言葉が気がかりだった。

彼が家に居られなくなっているのはなぜなのか、その問題はわたしたちにはわからないまま彼とは会えなくなってしまった。



#### 駅の待合室で会った人

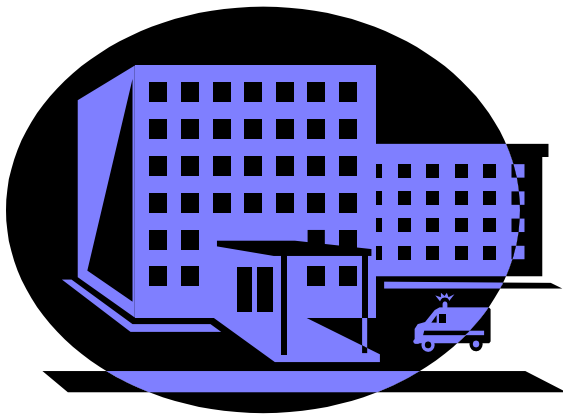
待合室のベンチで寝ていた人。最初会ったときは「自分は野宿はしていない」と話していたが、そこで毎月会って話していくうちに、実際は家がないということがわかった。以前住んでいたところは酒浸りになって出なければいけなくなっただけらしい。

ある年の越年越冬の炊き出しで会い、しんどそうな様子だったため、医療相談のドクターに意見書を書いてもらい、病院が開くまで更生センターの下（更生援護相談所）に泊まらせてもらうことになった。保険証がないため医療は難しいだろう、年金があるから更生センターに入れてもらうことも難しいだろう、と話していたが事情を説明した結果受け入れてもらえることになった。（保護基準以上の年金があると生活保護を受けられず、ケースワーカーもつかない。公的な支援が受けられないのだ。本来は更生センターのような生活保護法による施設にも入れない。）

病院に入院予定の日、彼は記憶障害のためか更生センターの場所がわからなくなり、行方不明になっていた。入院することができてからも、洗濯や健康保険証の作成、保険料の振込など彼一人では難しいことがあった。糖尿によるものか視力がとても弱く、人の顔や名前を覚えることが難しかった。退院後に更生援護相談所に泊まっていたが、失禁がひどく、周りの人から臭いの苦情もあって再び入院することになった。

彼はいろいろな病気を抱えていて、治療しなければ命に関わる。けれど一人では保険料を払い忘れて

しまうなど生活上困難なことがある。誰かそばにいて支える人が必要だと思えるが、本人は人には任せたくないの、手伝うこともうまくいかない。上にも書いたように、年金があるために公的な支援が受けられず、自分で解決することを求められる。でもそれは不可能だ。病院も症状が軽くなれば出されてしまう。老人ホームに申込みに行っても、「周りとの調整して暮らせませんか」と聞かれた時、彼は「ケンカはせんけど売られたら買うで」と言っていた。彼はどこに居たらいいのだろう？



### 病院訪問で会った人

胃ガンで以前入院していて、今は市営住宅で暮らしている人。ある時会うと「市営住宅に監視カメラが設置され、監視されている」と訴えられた。「自分はいじめられている。今日のように、自分が外に出ると、住宅の管理人が、犬やネコを連れて部屋に入りこんで、部屋を汚したりする。光熱費がかかって仕方がない。冷蔵庫にネコの餌にする牛乳パックが5つも入れてあるので、どうするのかと（管理人に）聞いたら勝手にしろと言われた。」「冷風を噴出する仕掛けがあって、冷やされて、倒れた。またふうしんが出てくる。」などという話で、聞くほうも混乱してしまいそうだ。「ふうしん」は何かと聞くと「冷たい針」だそうで、それが足に刺さる。そういう装置があるので引っ越したいが、公団住宅に移れないか、という話だった。

いじめられたり色んなものが見えていらいらするのなら、病院に行ってはどうかと言うと、「ケースワーカーに病院に行かされたが、精神科で自分のことを精神病のように思っている。薬を出されたが効かないから、薬を飲むのも通院もやめた」とのこと

だった。

この3つめのケースにあるが、幻覚はその人にとっては本当に起こっていることなので、病識がもてない。精神保健相談員に繋げると、本人が「気違い」扱いされたと感じるケースもあり、簡単に解決できるものではない。病識の無い人は自分から治療したいと思えないため、病院まで至らない。自分や周りの人を傷つけて入院にでもならない限り、なかなか治療に繋がらない。専門の相談員や相談窓口は限られていて、私たちも助言や支援をしてもらえる場所がなくて困っている。

\* \* \*

上で挙げた3つの例以外にも、家にいるけれども家族関係や精神的な病気などで本人が居づらくなったり、家族から追い出されそうになっている場合もある。精神保健相談員や別の団体の紹介で、あるいはホームページを見ての相談もある。これらの人たちは野宿にはなっていないが、安心して暮らしていける場所がない。居場所がないのだ。

野宿をしていなくても厳しい現状がある。今の労働に耐えられない人や社会の重圧でうまく暮らせなくなった人が今後野宿に追いやられていくのではないだろうか。夜回りでは直接会わなくても、今居宅で不安定な状況にある人がいる。わたしたちには何ができるのだろうか。どうしてこんな状況が起きているのだろうか。そう考えさせられる人にちょくちょく会う。

## 2-2 夜回りにまつわる数字

山村 麻里子

### \*夜回り参加者と出会った人数 (2009.7-2010.6)

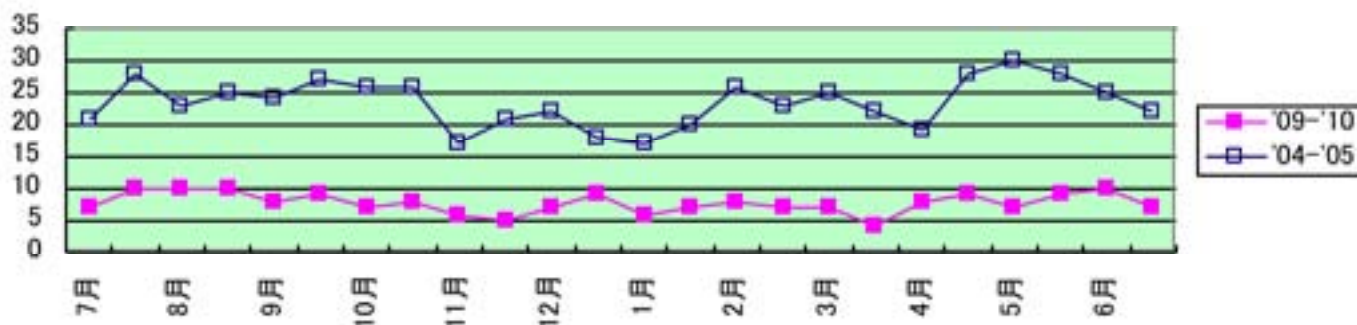
実施日 (‘09-’10)	夜回り 参加者数	訪問先 (出会った人数)
7/11	8	17(7)
7/25	6	17(10)
8/8	8	14(10)
8/22	9	15(10)
9/12	11	15(8)
10/3	9	14(9)
10/10	10	15(7)
10/24	7	14(8)
11/14	5	14(6)
11/28	6	15(5)
12/12	6	13(7)
12/26	4	16(9)
1/9	6	14(6)
1/23	5	14(7)
2/13	9	17(8)
2/27	5	16(7)
3/13	7	15(7)
3/27	4	12(4)
4/10	7	17(8)
4/24	7	16(9)
5/8	7	14(7)
5/22	6	16(9)
6/12	7	18(10)
6/26	5	12(7)

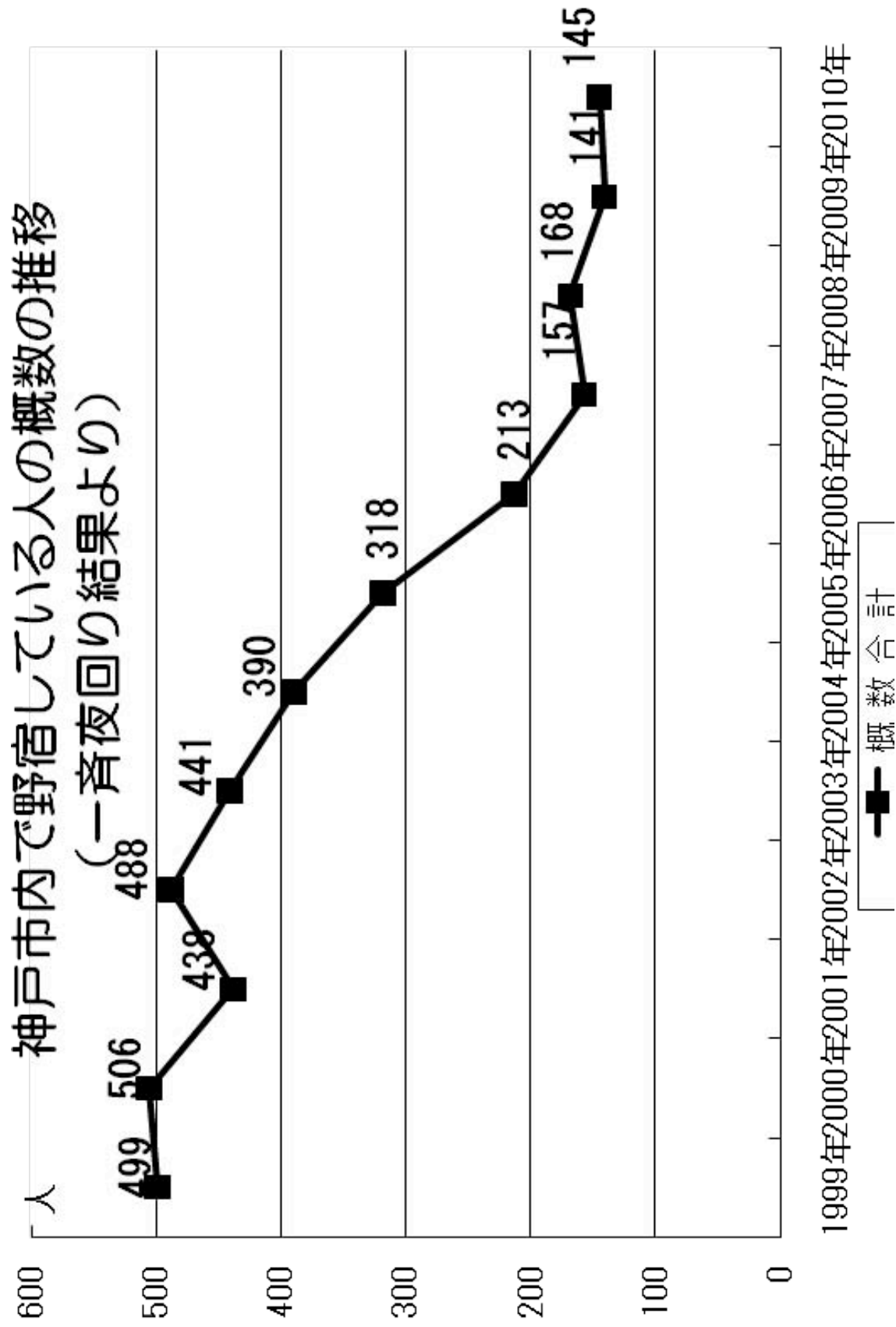
#### 【一斉夜回りと人数】

私たちはほかの夜回りグループとともに、毎年7月に神戸市内を一斉にまわって野宿している人の数を調査しています。ここでは2009年7月から2010年6月にかけての私たちの夜回り範囲での人数の変化を左の表で、それと5年前との人数の比較を下のグラフで表しています。また、1999年以来の一斉夜回りでの人数の変化を次ページにグラフで載せています（神戸の冬を支える会提供のものを修正）。

私たちのまわる灘・東灘区は、市内の他地域より住めるところは多くないけれど、定住できる場所が少なくてあります。神戸市全体の人数が減っているのは、さまざまな団体が、きちんと生活保護を受けられるように働きかけてきたことが大きいですが、それでも毎年新しく野宿になる人は少なくないです。ただ、住める・寝られる場所が限られているため、なかなか出会いにくいことも、人数の減少にかかわっていると感じます。

1年間の夜回りで出会った人数(5年前との比較)







## 2-3 神戸市と「ホームレス」対策

### ～「野宿の人は福祉事務所で生活保護の申請はできません」～

鍋谷 美子

#### 兵庫荘へ

2010年3月31日、兵庫荘に見学に行きました。兵庫荘は一泊50円で泊まれる、神戸市宿泊施設条例による無料低額宿泊施設。条例によると、「住居のない生計困難者を宿泊させるため」につくられた施設だ。条例には性別についての記述はないが、実際には入れるのは男性のみという運用がされている。

これまで、夜回りで出会う人たちに、更生センターや兵庫荘、磯上荘（一泊200円で泊まれる簡易宿泊施設。こちらは運営は社会福祉協議会）などの施設を紹介することがあるものの、そこに行ったことがないというメンバーも多く、見学に行こうと企画したものだった。更生センターにはなるべく毎年見学に行くようにしているが、施設内の取り組みは、やはり少しずつ変わっている。兵庫荘や磯上荘でも、長年の間に変わっていることもあるだろう。ともかく、初めてのメンバー二人と、震災以来神戸の夜回りに関わっている一人で、訪ねてみた。

事前に「YWCA 夜回り準備会」として見学したい旨を告げていたためか、当日は神戸市保健福祉局保護課の石田係長も来ており、私たちの質問にいくつか答えてもらった。その中で、現在更生センターで、居宅の生活保護の申請もできる、という話が出る。私たちはびっくりした。

#### 神戸市の生活保護はどういうふうに行われているか

私たちから見た対応はこうだ。ふつうは市長が福祉事務所の所長に保護をするかどうか決定をする権限を委任する。つまり、福祉事務所に生活保護の申請を受け付け、そこで審査をしたり決定したりする。そのために福祉事務所長委任規則というものがある。そのために福祉事務所長委任規則というものがあって、児童手当や障害者支援にかんすることなど

生活保護以外にも膨大なことに関する権限が委任されるのだ。そしてもちろん、神戸市の福祉事務所長委任規則にずらっと書かれている中にも、生活保護に関することは含まれる。ただし、その後ろにカッコ書きで、「住所不定者は除く」と付けられているのだ。

つまり、「住所不定者」の生活保護は、「福祉事務所では受け付けない」で、神戸市長がその権限を持ったままというふうの説明されている。それで、市長が直接保護申請を受け付けるわけでもなく、保護課の保護係の直属の施設である更生センターがその窓口になっている。更生センターは入所の生活保護施設なので、そこに入って保護を受けてもらう、という対応がされているのだ。しかし実際は、更生センターで保護を受けていて、そこから入院になった「住所不定者」の生活保護は、一定の期間が経つと、各区の福祉事務所に移管されている。つまり、「住所不定者」の生活保護を各区役所でも取り扱っているわけで、この委任規則では説明がつかないことが行われている。最近「住所不定者」という言葉が「ホームレス」に変わったが、対応としてはあいかわらずだ。

家がある人には福祉事務所で保護申請を受けつけ、そのままそこで保護を受けることもできるのに、家がない人には保護申請の受けつけさえせず、施設での保護しか選択肢がない、という状態。もちろん生活保護法には「住居のない人の生活保護は違う扱いで」とか「家のない人の生活保護は施設で」なんてひとつも書いてない。それどころか、「家がなくても現在地がその福祉事務所内であれば、そこが保護すべき」と書いてあるのだ。

野宿している人の支援団体がつくった全国向けの生活保護申請マニュアルにも、「まずは福祉事務所へ行こう！」と書いてある。それが通らない、特殊な地域が神戸市なのです。

\* \* \*

さて、これまでの神戸市の、家をなくした人・野宿している人への対応はどうだったか。その変遷をまとめてみる。

## 退院したら即保護廃止が当たり前だった

野宿している人にたいしては、病気や怪我などで入院になった場合、入院している間だけ保護という取り扱い。退院したらまたもとの、野宿場所へ戻ってください、という対応だった。この頃更生センターは一度入ったら出られない、というような長期滞在状態で、入るのも難しかったという。退院したのち、更生センターを勧められるのはまだマシな方だった。体調が悪かろうが、高齢だろうが、保護は入院期間だけ、退院したらすぐ打ち切り。よっぽど状態が悪い人に更生センターを勧めるぐらいだったという。また、家に住んで保護を受けていた人が、その家を失ったら、一旦保護は打ち切りになるということもまかり通っていた。「家がみつかったらまた来なさい」というのである。



## 更生センター・更生援護相談所

灘区にある更生センターは生活保護法で定められている神戸市の更生施設だ。1つの建物の3階部分が入居施設。同じ建物の1階に同じく神戸市が運営する更生援護相談所という無料で宿泊できる一時宿泊施設もあり、2階が更生センター・援護相談所兼用の事務所などになっている。どちらも住居のない生活困窮者のための施設である。

18～19年ほど前に、更生センターに初めて所長が配置される。それまでは現場の職員だけでまわっていたそうだ。その所長の改善により、初めて所内作業やレクリエーションなどが行われるようになった。それまでは本当にそこに入っているだけで、何もすることがなかったという。(こういった更生

施設は全国で東京から神戸の間にも、計20か所しかない。そのうち10か所が東京に集中している。) 名古屋以東の多くのところは路上から居宅への中間施設としての働きをしているようだが、関西はそれぞれ独自の対応になっている。他のところもそれぞれ問題はあるが、神戸では退所時に敷金を出して居宅へという道筋がない、と言うと他地域で支援している人に驚かれる。かつては、更生センターに入りたいという人がいても、出て行くときの道筋がないため「入ったら死ぬまで出られない」という噂もされていた。それがおかしい!といろいろな働きかけが起こってきたのは、その実態が分かるようになってきた震災後のことだった。

## 震災直後

1995年の震災当時、全国各地から支援物資、「ボランティア」が集まり、救援活動がひろがった。そのとき、「住所不定者」「ホームレス」と言われる人たちは、救援活動の対象にもされなかった。それはおかしいと感じるいくつかのグループや個人で、そういう人たちの課題を考えていく集まりができ、次第に野宿者支援という、取り残された人たちの問題に取り組むようになっていく。震災後初めての冬を越すために、東遊園地にテントを張り、野宿していた人と支援にきた人がともに泊まり込んで、毎日の話し合い、神戸市との交渉を経て、さまざまな処遇改善を勝ち取る。

その頃野宿している人には「更生センター(この場合は更生援護相談所のことを指している)しかない」と言っておきながら、更生援護相談所にはその人たちすべてが寝られる場所も設備もなかった。とくに年末年始、行ったのに入れず追い返されるということがしばしばあり、そういうことがないように増床を求めた。その結果、二段ベッドが置かれ、入れる人数は倍増したのだった。それでも、実際に野宿している人がすべて入れるようなキャパはない。そして、その頃以降現在まで、更生センターの対応はほとんど変わっていないとも言える。

## 更生で保護申請?

今年3月の石田係長の発言では、更生センターで居宅保護申請ができるという。そのことを更生の

CWに確認してみると、CWもびっくりしていた。相談を受ければ対応はするが、敷金などのいらぬ物件や支援団体に紹介するなどし、結局は野宿ではない状態にしてから、各区の福祉事務所で申請するというかたちになっているようで、結局神戸市の姿勢は崩されていないままだった。

### 磯上荘で保護申請！

これまで、兵庫荘・磯上荘に居て、仕事を失ったりしてその家賃も払えず困窮した人も、そこで保護申請はできなかった。申請をしても受け付けられなかった。それはおかしいと審査請求をすると、申請した時点で「住所不定者」になるので、ここではなく更生センターで申請せよ、という説明が出てきたりした。しかし、現にそこに住んでいる人が生活に困っているというのに、そこでは申請ができない理由は訳が分からず、無茶苦茶な説明だ。

私たちの兵庫荘訪問から少しして、磯上荘で保護が申請できるようになったという話を聞く。カトリック社会活動センターの方に相談がきて、磯上荘入居者で保護を受けたいという人を、更生センターに送るのではなく、磯上荘のある中央区で保護申請して、受理されたというものだった。これまでもそういう話がなかったわけではないが、再び審査請求もし、おかしいと追及するなかで、神戸市側が対応を改め、今回初めて最後まで支援がうまくいったのだ。これで、家がなくて困っている人の生活保護申請は更生センターのみが窓口だ、というこれまでの前例が一つ崩れた。その後も希望する人は、同じく申請をして、通っている。

### 「窓口は更生センターのみ」のカベ

あとは、「家のないひとは更生センターでしか保護を受け付けられません(=更生センターでの施設保護です)」というカベだ。これは、神戸市ではどの福祉事務所でも徹底していて、「うちでは取り扱えません」という。初めにも触れたが、最近、生活に困っている人、野宿せざるをえない人のための生活保護マニュアルのような冊子や本がいろいろつくられているが、まず行くべき窓口は地域の福祉事務所となっている。神戸市では、日本で唯一それが通らない。

野宿している人が更生センターでなくても保護申請して、そのまま敷金支給してもらい、居宅になるという道筋をつけていきたいと、これまで何度も申請は行われてきた。しかしそのたびに、申請書は福祉事務所から更生センターにまわされるのだった。これは、保護を受けたいという本人の意思もあることなので、わたしたちだけで突き崩せるカベはない。神戸市を相手に時間をかけてたかかって、勝ち取れるのか、それよりドヤや融通をきかせる大家さんの物件に頼んで、家を確保してから福祉事務所に行き、保護申請をする方が、今困っている本人のことを考えたらいいということもある。もちろん住む家の選択肢は限られるが、そうやって野宿している人を「なんとかして」家のある人＝「ホームレス」でない人にしてから、福祉事務所に申請に行くのである。つまり、「ホームレス」は申請できない。おかしなことだが、これが神戸で行われていることなのだ。

ただそれも、そういう大家さんや支援者にたまたま会えた人に限られるということになる。権利というのは本当は、誰でも平等に行使できなければならない。

私たちはいつでも、野宿している人から希望があれば、更生センター入所ではなく、敷金を出してもらって家に入り、保護を受けられるように、手伝っていきたいと思っている。神戸でも当たり前、野宿している人が、野宿しているままで、福祉事務所で、生活保護を申請できるようにしたい。そして本当は、一人で福祉事務所に行つて申請すれば、受理されるべきなのだ。

## 2-4 夜回りって何？

佐野 歩

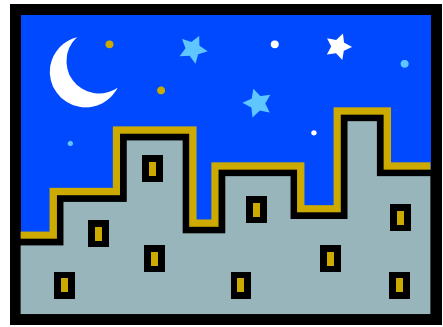
夜回り準備会(仮)の夜回り活動とは、一体どういうものだろうか。

夜回り準備会(仮)の活動は、夜に回る以外にも病院訪問をしたり、夜回りで相談があった人を昼回りしたりといろいろあるが、ここでは、実際に夜、回ることを指して夜回り活動としてそれがどういふものか考えてみたい。

神戸YWCA夜回り準備会(仮)のスローガンとして、

「野宿したくない人が野宿しなくてすむように」  
「野宿せざるを得ない人の人権が損なわれないように」

の二つがある。



#### <野宿したくない人>

野宿の状態から脱出するのはとてもハードルが高い。仕事の問題、借りる部屋の問題、生活保護の問題等、課題が山積している。今実際に野宿している人以外にも、今は家にいるが、家族との関係などで家にいる状態を維持するのが難しい人もいる。また、派遣などの不安定な職についていて、派遣切りに遭うことがそのまま家を失うことになる人もいる。今の社会で、これらの課題を誰の手も借りずに一人で解決していくのは困難な場合が多い。そして、大半の人が誰かの手を借りないと野宿を脱出できないという社会構造も問題だと思う。だが、機械的に居宅に移れる制度を整備したらそれで解決とは思わない。居宅に移りやすくすることはもちろん必要だが、それがその人を孤立に追いやることもある。野宿している、していないを問わず私達はだれしも、常日頃信頼して相談できる人の存在というのが必要だと思う。

#### <野宿せざるを得ない人>

野宿をしている人は、まさか自分が野宿になるとは思っていなかったり、野宿したくないと思っていたりする人が多い。

だが、野宿している人が全て、「野宿したくない」という希望を口にするわけではない。DVで家から逃げてきた人など、逃げる前にいた場所が野宿状態よりひどかったため、選択の余地なく野宿している人もいる。そしてしばしば野宿している人は襲撃や追い立てといった、人権侵害に遭う。

野宿している人がこれらの課題を解決し、野宿の状態を脱するためのきっかけ作りの場となる。夜回り活動とはそういうものではないかと思っている。

しかし、普通に考えた場合、野宿していきなり見知らぬ人から声を掛けられた時、たとえ本人が野宿状態を脱したいと思っても、野宿状態で困ったことに遭遇していても「じゃあ、手伝ってもらおうか」とはすぐにはならないであろう。

わたしなら、「貧困ビジネスか?」と疑ってしまうと思うし、また「どうせ何もしてくれないくせに偽善者ぶらないでくれ」とか思ってしまうそうだ。また、そのような見知らぬ人には自分が野宿をしていることすら知られたくないと思う人もいるだろう。さらに、野宿している人より若い人が夜回りに来た場合、「年長者として、自分が困っていることを知られたくない」と思う人もいるだろう。

一方で、最初からそんな不信感を抱くことなく夜回りを受け入れてくれる人もいるし、夜回りを受け入れながらも本音はなかなか言わない人もいる。当然のことだが、野宿している人にもいろいろな人がいるのだ。

そして、そういういろいろな人に相談してもらい、自分もまた相談し、野宿したくない人には野宿状態から脱出するための道筋を一緒に歩いていくためにはやはり相互の信頼関係が必要ではないか。

だが、信頼関係をつくるといっても実際に行うのは難しい。

信頼関係はお互いがつくっていくものなので、私たちにも信頼してもらうに足だけのものがなければならぬ。また、信頼関係をつくるためのマニュアルなんてものが存在するわけでもないの、一人一人の人とお互いに模索しあいながら、誠実に向き合っていくのがいいだろう。もちろん、私たちが相手の人たちを信頼することも必要だ。信頼し、

信頼してもらい、相談してもらって、一緒に問題に取り組んで、それでうまくいくこともあるし、うまくいかないときもある。

信頼関係をつくるのって千差万別だ。でも、夜回り準備会（仮）には夜回り準備会（仮）なりの試行錯誤のやり方があると思うので、私なりにそのやり方の例を紹介してみたい。

\* \* \*

神戸で、夜回り準備会（仮）のほかに夜回り活動をしている団体の一つとしてカトリック社会活動神戸センター（以下、カトリックとする）がある。カトリックはセンターという活動拠点を持っている。センターで相談を受け付けたり、風呂や洗濯の場を提供したり、別の公園においてだが、日常的に炊き出しをしてそこでも生活相談を行ったりしている。したがって、当事者の方が相談に来ることができるし、その場合はそこでゆっくり話し合っ問題に取り組んでいくことができる。また、当事者自ら問題を解決するために相談に来てもらっているという前提があるので、話しにくいことでも解決に必要な当事者が話したこと以外に問題はないか、より深く確認することもできる。

しかし、夜回り準備会（仮）の活動はそうした拠点を持っていない。拠点をつくれたとしても、そこで日常的に相談に乗れるような人手もない。だから、夜回りでこちらから押しかけていくしかない。こちらから押しかけていっている以上、当事者の方が話したくないことは無理やり聞き出すことはしたくないし、してはいけないと思う。さらには、夜回りをしている私たちも複数で回っているし、野宿している方も周りに仲間がいることもある。そうするとやはり、一対一で話すのとは違い、簡単に話せないこともあるだろう。でも、活動拠点を持たないという制約や、信頼関係を築きたいという希望から、野宿者の方の話してくれたことはじっくり聞きたいと思う。したがって、相談事などもまずは夜回りの場において聞いて、相談内容によっては夜回り以外の場でも関わっていくということになる。

そうしたことから、夜回り準備会（仮）の夜回りでは野宿している方一人一人と話す時間が長い。また、話す話題も、体調を確認したり、困ったことを

聞いたりということだけではなく、世間話、故郷の話、子どもの頃の話等多様である。「相談」というかたちで持ちかけられるだけでなく、そうした雑談の中から当事者にとっての解決したい課題が出てくることもある。そうしたときに、それを受け止められるような関係でありたいと思う。

## 2-5 寄せ場交流会報告

### —神戸でのとりくみ—

鍋谷 美子

寄せ場交流会とは、全国の寄せ場、野宿の運動にかかわるひとたちが年に1回集まり、文字通り交流するために行われている集まりで、2010年で27回目を迎えた。初めは何人かで始まったその集まりが、今では200人を越えることも珍しくなくなった。一泊2日の行事なので、そのすべてが泊まれる場所の確保、食事など、準備はかなり大変。そして2010年は、その受け入れを神戸ですることになっていた。

#### これまでに起こっていたこと

この交流会、泊まりでお酒が飲めることもあって、人数が増えるごとに、酒の席でのトラブルがたびたび報告されるようになっていた。私が参加し出したのは6年ほど前だが、その頃からすでに交流会の始まる前に、前年主催地からの参加者男性より、全体に「酒を飲んでセクハラなどが起こっている。それで来れなくなった女性もいる。こんなことが続くようなら、交流会自体やめた方がいい」などのアナウンスがされていて、一体どんな会やねん？と思ったのを覚えている。

また、去年の報告書でも書いたが、私自身が炊き出しの場で体を触られる、その後周囲の人に二次被害を受ける、ということがあり、神戸全体でもこの問題は取り上げられ、話し合いを続けてきた。その後、翌年の炊き出しでは何かいやなことがあつたら声をあげていい、つらくなつたら逃げることもできる、というメッセージとともにセーファー・スペースという取り組みを持った。



そういったことをふまえて、神戸で寄せ場交流会をするなら、その問題を避けては通れないと、実行委員会であんならかのアクションをしよう、と少しずつ話し合いをしてきたのだった。

### 問題を表に出すまでの困難

はじめは、これまで寄せ場や活動現場で起こってきたセクハラを含むハラスメントの事例を集めて出し、何が起きている何が問題なのかを皆で共有するところから、と考えていた。そこで、私が知っている範囲での寄せ場で起こった（問題になった）セクハラ事件についてのききとりを始めていった。おもに大阪や東京のいくつかの話聞いてきてから、神戸の実行委員会で簡単な報告をした。そこで、思いがけず反対意見が出た。

「起こったことには、今も現在形で当事者がおり、簡単には扱えない」「自分たちのところで起こったことやしてきたことならまだしも、よそのことを出して話すのはどうか」「関係者から批難・反発が吹き出すだろう」「結局、糾弾が始まってしまうのでは」など。私は、それも受けたうえで、共有・問題化できれば、と思ったのだが、反対も強硬で、実行委員会としての落としどころを見つけ、やれることをやろう、ということになった。結果、寄せ場交流会が始まって最初の30分を使い、神戸ではこれまでハラスメントに対してどう対応してきた／こなかったか、現在どういう取り組みをしているか、なぜそれをするに至ったか、などを「神戸からの報告」というかたちで出そう、ということになった。以下に、具体的な経過なども載せる意味で、当日撒いて報告したビラをそのまま掲載します。

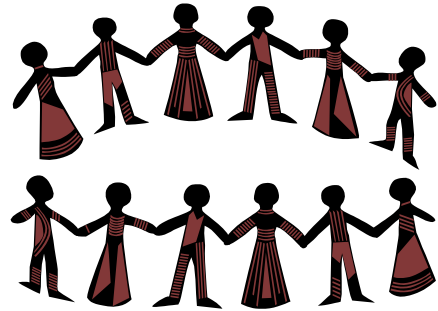
### ⇒次ページより 4p「神戸からの報告」ビラ

#### 「神戸からの報告」のかげに

上記の実行委員会内でのやりとりもあり、このビラには載せられなかったさまざまな事例、聞き取った人たちの声が、ビラのうしろに隠れている。聞き取りをしなければ、確信を持って、このことを伝えていかなければ、と思いつくことはむづかしかった。

「野宿者支援」にかかわる女性から、どこでも聞いたのは、「(これまで) 言えなかった」「しんどかつ

た」という声だった。やはりこのことは、話されてきていないし、起きているのに起こっていないこととされてきた。今回はほんの少しの問題提起にし過ぎないが、人を尊重しようとする活動の中で出てきたこの問題に、さらに向かい合って、広げていけたらと思っている。



★このかん、全くこの問題について理解してなかった自分を認識しながら、人に教えてもらいながら、セクハラやハラスメントについて考えるのに参考になった本やサイト：

#### 【本】

「さらば、原告 A 子-福岡セクシュアル・ハラスメント裁判手記」 晴野まゆみ

「悔やむことも恥じることもなく-京大・矢野教授事件の告発」 甲野乙子

「なぜ男は暴力を選ぶのか-ドメスティック・バイオレンス理解の初歩」 沼崎一郎

「女子大生のための性教育とエンパワーメント『ジェンダー論』の教え方ガイド」 沼崎一郎

「モラル・ハラスメント」 マリー・フランス・イルゴイエヌ

#### 【website】

「セクハラ」

<http://homepage2.nifty.com/tumaran/>

「いじめはモラハラ」

<http://morahara.nukenin.jp/>

「こころのサポートセンター・ウィズ」の「虐待・暴力」のページ

<http://www5a.biglobe.ne.jp/~with3/gyakutai/gyakutai>

### 0.今回、実行委員会で議論してきたこと

- 毎年寄せ場交流会では、ジェンダーやハラスメントについてのことを分科会で取り上げてきたが、話をするのはむづかしい
- 全体会でそれぞれの活動現場（寄せ場交流会含む）で起こってきたハラスメントについて取り上げたいという意見と、それはむづかしい、という意見があった
- 活動現場で起こるセクシュアル・ハラスメントと、そもそも女性は野宿すること（&賃労働）からも排除されている、ということが同じ背景からきているということを説明しようとしたらすごく時間がかかる
- どういうふうに全体でとりあげるのか、過去に寄せ場であった具体的な事件をあげてもさらに傷つく人が出るのではないかという危惧がある
- それでは、神戸でどんなことがあったのか、具体的な取り組みができたのか、できなかったのかを報告してはどうかという話になった

- ・ これまでこの問題は、意図的に避けられてきた
- ・ セクハラ含め、嫌がらせが起こるところには必ず権力関係がある
- ・ 相手の意思は無視して、自分の意思だけを通そうとする行為すべてにNO!と書きたい

とりあえず実行委員会の姿勢、意見として以上3点は全体に発表したい。

### 1.神戸からの報告—この5年間のこと—

全国地域・寄せ場交流会では分科会が設定され、各実行委員会によって名称に幅はあるものの「女性」、「セクシャリティー」、「ジェンダー」が課題とされ、協議の場が作られてきました。5年前の神戸で行った寄せ場交流会においても、これまでの「交流会」の経緯を踏襲する形で「ジェンダーから見る野宿者問題」の分科会を設けました。その準備の過程で、この課題については日常的な活動の中で取り組んでいかなければならないとの認識を持つことができましたが、実際にはその後、活動の中で取り組むことができませんでした。

そうしたなか、08年から09年の越冬・越年活動の場で、セクシュアルハラスメント事件がおきました。そのときの対応のまずさから一次被害だけでなく二次被害をももたらせる結果となってしまいました。それは、日常的な活動の中でこの問題に取り組む意識がなかったことによるものではないかと考えます。

そのような反省のもと、昨年はセクシュアルハラスメントについて、兵庫県野宿者支援懇談会の中で話し合いを重ねてきました。そして、09-10年の越冬越冬活動では「セーフスペース」を設け、セクシュアルハラスメントは人間の尊厳を奪う悪質な行為であることを参加者に伝えるとともに、被害を受けた人に対してもその尊厳が傷つけられたことを放置しないことの姿勢を示す具体策として取り組むことにしました。もちろんまだまだ不十分どころが多いとも感じますが、できることから少しずつ懸命に取り組むほかないと感じています。このかに神戸で大きな変化が起こったわけではありませんが、これまで話されることのなかったセクシュアルハラスメントや関係のあり方についてなどをまずは話すことができたことが、一番の変化ではないかと思えます。

セクシュアルハラスメントは男性から女性に向けてのみ行なわれるわけではなく、同性間でも起こります。しかしながら、言うまでもありませんが、セクシュアルハラスメントの多くは男性から女性に対して起こっています。また、セクシュアルハラスメントと複合するパワーハラスメント、多数と少数、先輩と後輩、支援者と当事者と、様々な局面でハラスメントは発生します。加害と被害を固定的に捉えることはできません。人と人が出会いかかわる

時、指摘されなければ見過ごされてしまうことがあります。残念ながら多くの場合被害を受けた人が声をあげない限りは対応されることはなく、被害を受けた人も対応を望めないと感じる場面では訴え出ることはなく、ハラスメントの事実は無化されてしまうこととなります。そして、痛みや悔しさ、孤立を強いることとなります。人間としての尊厳を重んじることを願う場でそのようなことはあってはなりません。しかし、これまでなかったとは言い切れず、さらに被害感情の痛みを負わされたままにその場から立ち去らせるようなことがあってはならないと痛感しています。

## 2. ジェンダー分科会の“歴史”

Alcohol!!

Gender..

Addiction?

寄せ場交流会はこれまで26回行われている。そのうち、東京「ほしのいえ」での支援活動の中での問題を受け、93年の東京から初めて「アディクションについて」という分科会がもたれた。それは、女性が男性の世話をしてしまう、そういう関係をつくってしまうということを「共依存」として問題にしたものだった。

その後、アディクションは「アルコール依存症」や「薬物依存症」などといった依存症の問題として取り上げられるようになっていく。一方、96年の大阪で、交流の場でのセクハラが起き、そのことは問題化されたよう。しかしその後も問題は続き続けた。そのこともあってか「女性」や「関係性」など必ずジェンダーにかんするものが分科会に入れられるようになっていく（「ジェンダー」というタイトルが使われたのはおそらく2005年の神戸が初）。04年以降は実行委員会や有志から、寄せ場交流会、とくにお酒の席で起こっているセクハラについて、大きく問題提起がされるようになり、昨年東京ではセーファー・スペースという安心できる場所づくりの取り組みもされた。夜の交流企画では、「過剰姉妹」がパフォーマンスをとおして、まさに初回のアディクション分科会で話されたであろう女性が求められがち・しがちな役割について、男性へも女性へも考えるような問題提起がされた。

同時に、寄せ場交流会で出会った女性たちが、自分たちが直面している問題に対し、話したり考えたりする場をつくらうという試みもあった。99年の東京で全体にアナウンスされ、やりたいと集まった人たちで第一回目の「女性会議」が開かれた。名古屋、東京、横浜、大阪など各地から20人以上の参加があったという。その後、主体となったメンバーに入れ替わりはあったものの、同じく02年の静岡のときに集まった女性を中心に、二回目の「女性会議」がもたれる。参加者は女性に限らず、野宿している女性の問題や、女性支援者が寄せ場に「居づらい」と思う出来事はなぜおこるのかなどに関心のある人たちが集まっていた。

\* \* \*

たとえば、女性専用車両。すでに定着した感じがあるけれど、どうして女性を隔離するような車両ができたのか、男性も女性も嫌だなと思っている人がいるでしょう。それは、一部の痴漢をする人々が後を絶たないから。そのために、男性全体が疑われ、女性の避難場所をつくらざるをえない。どちらにとってもいいことではありません。でもそのとき、問題は「どちらか」や「一部」にあるのではなく、その状態をつくってしまっているわたしたちみんなで考えるべきだと思います。

寄せ場交流会で、分科会だけではなく、全体でこの問題を共有したいというのはこういう意図です。

寄せ場交流会という年に一度のイベントだけではなく、日々活動している現場でも、いやらしい言葉かけや体を触る、つきまとうなどの行為はいつでも起こっています。そのとき、声をあげられなかったり、あげられなかったことを責められたり、逆に声をあげても誠実に受けとめてもらえなかったり。そのために現場に行けなくなったり、一人で誰にも言えずに抱え込んでいたりする人がいっぱいいると感じています。そうして傷ついた人をそのままにせず、問題を解決しともに活動したいと思っているからこそ、全体の場で問題提起したいのです。一度、すべての人にこのことを意識してほしい、考えてみてほしいと思います。



そして、これまで表に出てきただけでも（その裏には言えなかった、言ったけれど否定された多数の例があることを考えても）、主に起きているのは男性から女性へのセクハラだという現実をはっきりさせておきたいと思います。

### 3.神戸実行委員会から、伝えたいこと

#### 【二次加害が被害者を追い詰め、問題を見えにくくさせている】

直接、目に見えやすいかたちで起こる一次加害はもちろんのこと、二次加害によってさらに被害者が傷つけられているという現状があります。被害を受けたとき、まずは問題を外に出したいと思っても、周囲がそのことを受け止めないことが、より大きなダメージを被害者に与えることとなります。被害者は、その被害について我慢して、その場にとどまるか、（問題を外に出しても出さなくても）その場を去るかの選択を迫られることが多いです。

《二次加害って？》

「そんなことはたいしたことない、よくあること」「モテていいじゃない」  
「男なんてそんなもんだよ」「あの人がそんなことするはずがない」  
「自意識過剰だ」「あなたの格好が悪い」「あなたの振る舞いが悪い」  
「男なんだからそれくらい我慢しろ」「女なんだから喜ばばいい」などの言葉

★ 性的ないやがらせは相手を深く傷つける行為である。

- ・決して人間関係の「潤滑油」などではなく、人権侵害である。
- ・人間不信に陥らせたり、生活や仕事に支障を来すようなダメージを与えることもある。
- ・されている側はものすごく嫌なことなのに、している側は許容範囲だと思っている。

こういった点を、大多数のひとで共有できれば、被害に遭った人も、「自分は怖い、しんどい、きつい」と思っていることを周りに相談しやすくなると思います。以下はおもに一次被害が起こったときの対応について書いていますが、どちらも、周りの人の対応がとても大事になります。

#### 【加害者になるかもしれないあなたへ】

「自分が加害者になるなんて」「あんな些細なことを加害と言われるなんて」「被害者を励まそうと、よかれと思ってしたのに」

何が加害と言われるのか、むづかしいです。女性も加害者になることがあります。

しかし、「そんなつもりはなく」でも、相手を傷つけることはあります。「それはいやだ」

「やめてほしい」と相手や周りの人から言われたとき、一度それをきちんと受けとめてください。してしまったことは取り返しがつかないけれど、そのことについて、謝り、相手が望めば話し合いをするということもできます。自分がした行為がなんだったのか、周りの人の助けを得ながら、一緒に考えることもできます。

#### 【被害者になるかもしれないあなたへ】

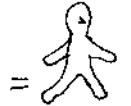
被害を受けたことについて、あなたが悪いのではありません。

あなたは嫌なことに対して「いやだ」と言ってもいい！

「いやだ」と言ってもやめてもらえないときや、相手に面と向かって言うのがむづかしかったり怖かったら、周りの人に助けをもとめることができます。実行委員や信頼できる人に声をかけてください。実行委員にいやなことを言われたりされたりしたら、それも訴えてください。声をあげること自体が大変なこともあると思います。実行委員も万全ではなく、間違うこともあります。それでも、被害を受けた人や状態をそのままほっておきたくない、と思っていることは伝えたいと思います。

例えば・・・

いきなり握手を求められても、したくなかったら断る。逃げる  
急に体の一部を触られたら、怒る！嫌さを伝える。逃げる  
勝手に写真を撮られていると感じたら、やめてほしいと伝える。逃げる  
つきまとわれているときも！



どれも、一人で対応できないと思ったら、実行委員に声をかけるか、周りに助けを求めてください。被害を訴えることはそれ自体つらいことですが、何らかのかたちで表にあらわしてほしいと思っています。時間が経っても、逃げた後でも、交流会が終わったあとでも、いつでも助けを求めてもいいのです。

#### 【目撃者になるかもしれないあなたへ】



周りに、いやそうにしている人がいると感じたら、何かおかしいなと気づいたら、声をかけてみてください。「さっきのはいやじゃなかった？」「だいじょうぶ？」でもいいのです。あとからでもいいのです。自分ではむづかしいと感じたら、実行委員にその様子を伝えてください。その場にいるのに知らんぷりしたり、反応しなかったり、場を壊さないように、となんとなく介入しないことが、被害者を追い詰めることもあります。

現実にはすべてのひとが、加害者になるかもしれないし、被害者になるかもしれない。そして目撃者になる可能性があります。

### プラスα

#### \*「交流」することへのリスク

「寄せ場交流会」は字の通り、交流するための集まりです。それは普段出会えない全国のいろんな人と出会い、話し、関係をつくる場でもあります。関係をつくっていくとき、仲良くなっていくときには、傷つける、(性的なこと含む)暴力が起こるというリスクもあります。

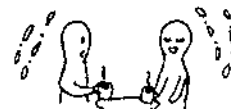
しかし、交流したいと思って参加する人が、暴力を受け、傷ついたのでそのままにしておくのでは、この交流会自体の失敗ということになります。初めにも書きましたが、「一緒にやりたいと思っているから、そこで起こる暴力への対応に取り組みたい」と考えています。そのことを、参加するすべての人に考えてみてほしいのです。

#### \*守られたいわけではない

「女性だから」という理由で守られたり、隔離されたいわけではありません。セーファー・スペースは、避難場所というより、ここにいる人すべてが、安心とは何か、どうやったら嫌な思いをせずに一緒にいられるか、を考えてこの場全体をセーファー(より安全な)・スペース(場所)へと変えていく実践なのだと思います。

#### \*次へ、これから？

神戸からは今、これくらいを発信したいと思います。このことは次へつながるのか、つながらないのか。今回、議論をするところまでは準備できていませんが、どんな形でも、ぜひみなさんの意見も聞かせてください。また、各地にこのことを持って帰って、話をしてみてください。何か起こって初めて話し合いをしていくのは当事者や周りの人にとってもかなりきつい作業です。何かが起こる前に、日常的に話ができる信頼関係をつくっていくことが大事だと思います。



★今回、実際に活動現場にいる/いた人(おもに女性)たちから話を聞かせてもらいながら、この文章のおおもとができました。それをもとに実行委員内で何度も話し合っ、こうした形になりました。特に歴史については、なかなか資料が残っていない中、探してもらいながらまとめたので、間違いや、実はこうだった、ということがあれば、指摘してもらえたらありがたいです。

## 2-6 僕の部屋のように

### 散らかった原稿

野々村 耀

別のところで紹介しているように【註1】、野宿している人の数は、神戸市内全体でも、私たちが夜回りしている範囲でも、調査に現れた数は、多かった時期と比べると、ずいぶん少なくなりました。奇妙なことに、多い、増えているという、大変ですねと言ってカンパしてくれる人がいたりするのですが、人数が減ったというと、マスコミを含めてたちまち関心が薄らぎ、消えてしまいます。基本的な問題が、解決したわけではないのに、そしてこれからますます根深い問題になるだろうと思えるのに【註2】、人数で判断されることには強い違和感があります。

いつも思うのですが、日本には、ストリートチルドレンと呼ばれる子供がほとんどいないように思えます。どこかの国で沢山の子供が路上で・マンホールで暮らしている。可哀想だからと、支援する支援団体もでてきます。それは良いのですが、では日本の子供はみんな幸せでしょうか？日本では、子供は路上に逃げ出す可能性がなく、家（庭）のなかで殺されたり、自分で死を選んだりしているのではないかと極端に言えば、殺されるくらいなら、家出できたらいいのに、と思わないでもありません。

\* \* \*

2010年の夏は、酷く暑く、多くの人が熱中症になり、何人もの人が命を失いました。僕もクーラーのない家で暮らしているの、耐えられない思いをしました。7月の終わりごろのことです。神戸市のある文化センターのロビーで(そこは冷房してありました)、友人とエスペラントの本を読んでいると、館長と名乗る人がやってきて、「ここは憩いの場であるから、勉強してはいけない」と言いました。そのことで、「市長への手紙」を書くことになる【註3】

のですが、本筋ではないので後に回します。そのやり取りの中で館長さんは、「この地域は一人暮らしの老人が多いから、ここでゆつくりと憩いの時を過ごしてほしいのだ」といいました。それは賛成できる考えです。しかし同時に、「ホームレスが長居するから困る」とも言いました。ある人には長居してほしいが、ある人にはいてほしくない、と言うのは、どういうことなのでしょう。そもそも誰かが文化センターに来たとき、私には住む家がありません、などと申告するわけがないから、館長は「見かけ」によってある人をホームレスと断定した、迷惑だと思った。公の施設でそのような差別がまかり通っているのでしょうか？

その少し前(7月24-25日)に、神戸で「第27回 全国地域・寄せ場交流会」という集まりがありました。僕は「排除」をテーマにした分科会に参加しました。「社会的排除」と言うのは、「貧困」の問題をとらえ直そうという観点から、いろいろ議論されているテーマです。イギリスなどでは社会的排除をなくすために、無理に働かせるというような問題も出てきていて、どんな分科会になるかと思っていたのですが、そういう議論はなくて、各地でおこなわれている「追いたて」に関する報告が主でした。

そのなかで、行政が公園等から野宿している人を追い出す際に、しばしば「住民の苦情」を口実にするという意見がありました。しかし、ただ口実に使われているだけではなく、実際に行政に対して、「追いでしてくれ」「ホームレスがいると怖い」と訴える個人や団体があります。しかし、その感覚は、煽られた情報、先入観に起因するものが多いように思われます。

他方、行政が、「住民の要求」を口実にしてしている場合も少なくありません。ということは、行政自身に「排除したい」という意志があるということです。ここ何年かは、「野宿している人」を支援しようとする団体も増え、人権侵害に対する抗議もあるので、行政も追い出しを正当化する口実をつけるようになりました。以前は「こんなところにはいけない」というだけで追い出すことが多かったのです。

地域・寄せ場交流会の分科会では、大阪、東京の

墨田区、渋谷区等々全国各地から追い出しの報告がありました。いろいろ抗議しても最後は実力行使によって決着されるのが現状です。行政が排除する気になれば、抗議する側が実力で突破することはほとんどありえません。

この交流会の数日後に、先に述べた文化センターでの出来事がありました。熱中症で倒れてしまいそうな暑さは、クーラーを使えないもの（炎天下で働く人、クーラーが買えない人、電気代が払えない人、テント生活や野宿している人など）にとっては災害だったとっていいでしょう。事実、死者まで出ているのです。だから冷房のある公共施設は、冷房のない人に対して避難所として解放されるべきだとおもいます。また文化施設としては、変に制約されずに使いたいという気持ちもありましたから「ここで勉強してはいけない」と言われたことに疑問を感じたのです。それで、「市長への手紙」を書いて出しました。それに対して「市長からの返事」が来ました。その結果、僕が本を読むことに関しては従来どおり可能になり、一件落着きました。

しかし「ホームレスが長居して困る」というのは、驚くべき発言であり、同時に本音でもあるだろうと思われまます。そう言った人は、それが当たり前のことだと思っていたから、たやすく口に出来たのでしょう。神戸市の公共施設（の責任者）が、一般の人の利用に供している施設から、特定の人を排除するというのはどういうことでしょうか？神戸市が、「ホームレスを差別する」という方針を持っているということになります。

市長からの回答には書いてありませんが、神戸市は建前としては差別を肯定はしていません。しかし、神戸市は、長年にわたって、野宿可能な場所を少なくしてきました。ある場所で暮らしている人に、工事をするから退いてくれといい、工事が終わってみると、2度と戻れない構造になっているというのがほとんどのケースです。

この報告書では、その様ないくつかの場所を紹介しています【註4】。ちなみに、これは神戸市に限っ

たことではありません。隣の芦屋市では、雨をしのぐことの出来る橋の下に、沢山の石をならべてコンクリートで固めて凸凹にし、寝られなくしたり、ベンチに更に複雑な金具をつけたりしています。

#### 【橋の下の凸凹】



#### 【横になれないベンチ】



構造的暴力という言葉があります。暴力と言うのは、殴る・蹴るといった肉体的な暴力や物理的強制力の行使、警察や軍隊の力を使った直接的なものだけでなく、仕組みとして不利な状況を押し付けることだとすると、町の作り方そのものが暴力的だといわざるを得ません。私達は構造的に暴力的な社会に生きていくようにおもえます。

野宿せざるを得ない人がいなければ、野宿できる場所は必要ないかもしれません（もともと、野宿せざるを得ない人がいなければ、出来なくする必要もないでしょう）。しかし、いろいろな事情で、現状では野宿するしかない人も少なくないのに、できる場所をドンドンなくすことは、その人を一層不便で危険な場所に追いやり、人権を激しく侵害する行為

です。

筆者が昔横浜にいたとき、野宿しているおばあさんに出会ったことがあります。「ここに来る前はどこにいたの？」と聞くと、老人ホームから逃げた、という返事でした。老人ホームのような施設に入れたら、一安心だと思っていたばくは、びっくりしました。こんなふうに書くと、「好きで野宿している」と思う人がいるだろうと思います。よく、「施設を作って、そこに収容すればよい」という人がいますが、屋根さえあれば解決するというものではありません。その人の側から見ると、その老人ホームでの暮らしは野宿よりつらかったのです。野宿より暮らしよかったら、逃げ出す訳がありません。しかし、今も、自分の価値観で、相手を決め付けるような見方は、無くなりません。

先に、「驚くべき発言だ」と言ったのは、「ホームレスの自立に関する特別措置法」第一条に、「ホームレスの人権に配慮し」とあることにも反するからです。この法は国や自治体は率先して人権に配慮すべきであり、問題解決が必要だと認めています。それに対して、館長の発言は＜自分のかかわる領域にいる人＞の人権を配慮するのではなく＜自分の領域の外に押し出そう＞というものです。＜自分の範囲内にはいないことにする＞。様々なところで見てきたことです。避難所から、地下道から、軒したから、学校の横の道路から……。

30年位前から、「きれいはいきたない」という言葉が耳について離れません。ある人にとって綺麗な環境を守るために、様々な仕掛けをする。物陰に腰を下ろせないようにするために、フラワーポットを置いてあるのがわかると、その花には底意地の悪さを感じられます。都市のデザインにはそういうものが多いようです。都市の住民は、ゆとりがなく、ぎすぎすし、隙間がなく、少しの不快感にも耐えられなくなっているように思えます。駅でも、バス停でも、町の中でも、気軽に坐って、ひと休みできる場所は少なくなりました。お金を払えば、腰を下ろしお茶を飲めるところは沢山ありますが、お金がなければ利用できません。その結果、年寄りや体の弱

った人が休息できる場所もまれになりました。ついでにですが、派遣労働者が組合の話し合いをするのに、金のかかる会場は借りられないから、コンビニで缶コーヒーを買って、前の駐車場にしゃがんで話し合っていると聞いたことがあります。誰でも、時にはごろっと横になって空行く雲を眺めたいと…でもベンチには変な金具があつて決められたようにしか座れない。

さて、「本音だろう」と言ったのは、私たちは自分と同じような仲間といると安心できるが、違う話し方や習慣や暮らし方の人といっしょにいと、それに慣れるまでは戸惑ったり、どうして良いか解らなかつたり、受け入れにくかつたりしがちです。場合によると、不快感や不安を感じたりするかもしれません。ですから文化センターに「野宿しているように見える人」がいると、「館長、あんな人がいると安心できない」という人がいたのかもしれない。

行政の一翼を担う館長には、人権に配慮する役割があるのですから、そういう苦情を言う利用者に対して、人権や公共について、理解してもらうよう努力する使命があると、ぼくは思います。しかし、ことによると、館長自身が、不快に思ったのでしょうか？ 出て行かせようとする前に、話したり、出会ったり出来たら、共感できることもあるだろうにと思うのですが。

\* \* \*

そんなことを思いながら、何日かして、市長への手紙を書きました。市長からの返事をもらい、あれこれ考えているときに悲しいニュースがありました。私たちが以前、夜回りしていたことのあるHAT神戸で、夜をすごしていた82歳の人を10人ほどの若者が襲ったというのです。8月17日の神戸新聞は「ホームレスに花火発射、けが人なし シート焼く 若者の集団が逃走」という見出しの記事を掲載しました。見出しには「けが人なし」と書いてあるのですが、本文を読むと、15日（前日）未明にも高校生ぐらいの若者10人に囲まれ…花火を向けられて手や首に軽い火傷を負っていたという、とありますから、けが人なし、ともいえないでしょう。



今年になって関西では、新聞が大阪と尼崎での襲撃を報じました。2月に起こった事件は4月になって「大阪・住之江 50代男性けられ流血・骨折 野宿者襲う無言の暴力 『背景に行政の排除』」という見出しで記事になりました。リードには、「生活保護を受ける人が増えて、路上生活者は減る一方、行政の排除が進み、路上に残された人は孤立している。」とあります。記事には、「2月2日の午後9時、突然声が響いた。『ホームレスは出てけー』。50代の男性は息を殺していた。」「隣のテントに助けを求めたが、不在。」「自分のテントに戻ると、数人に蹴られた。「足が不自由で、倒れたまま蹴られ続けた」「反撃しなかったのは怪我をさせると自分が傷害罪に問われるかと思ったからだ」。蹴られ続け、顔から血が流れ、目があかなくなった。2件隣のテントの人が通報し、警察で事情を聞かれた後、救急車で搬送された。肋骨が2本折れていたが、応急手当だけで帰された。翌日支援団体が駆けつけると立ち上がれなくなっていて、眼からも出血していた。(要旨) この記事の中で、「野宿者ネットワーク」の代表は「月に数件の襲撃被害がある」と話し、また別のNPO法人は「行政が野宿者をあからさまに排除することで、社会の眼がより冷たくなった」と指摘しています。(下線は筆者)

4月には、尼崎での事件が「野宿者のテント放火・・尼崎北署 殺人未遂容疑で中3の二人逮捕」という見出しで報道されました。3月29日武庫川河川敷で65歳の男性のテントに石を投げて、男性がいることを確認した後、ライターのオイルを撒いて火をつけテントを焼いたそうです。「石を投げたら追いかけられ、タバコをすっていて注意されたりして許せなかった」と供述している、と新聞は書いています。

そして、8月には、HAT神戸でも花火の連射で火傷させ、次の日にはブルーシートや衣類などを燃やすという事件がありました。この件では10月中旬までに次々と8人の少年が逮捕されました。

報道されなかったのですが、私たちが夜回りしている範囲でも2回、テントの火事がありました。

幸い、人がいなかったのですが、怪我などはありませんでしたが、そばのテントにすんでいる人は、火災があると自分たちが怪しまれるのではないかと、その場所から追い出されるのではないかと心配していました。

10月には東京・千代田区で公園に寝泊りしていた耳の不自由な67歳の人に、14歳の中学生が熱湯をかけ、全治一ヶ月の火傷を負わせ、逮捕されたという報道がありました。一週間前には石を投げたり、洗剤をかけたりしたとのことで、「反応が大きくて面白かった」と語ったそうです。

10月の下旬には、京都市議会で、指定業者以外が資源ごみを回収することを禁じる廃棄物処理条例の改正案が可決されました。野宿している人の残り少ない収入の道・生きる糧が奪われるという反対を押し切ったことです。同様の条例は全国各地(東京都杉並区、世田谷区、横浜市、さいたま市、大津市、大阪府内の6市など)で制定されてきました、と書いていたら、隣の芦屋市でも同様の条例を制定しようとしています。【註5】



住むところを維持できなくなり、野宿せざるを得ないところまで追い詰められた人を、さらに追い詰める社会のあり方は、何を意味するのでしょうか。あんなふうにはなりたくないと思う人は、そうならないために非人間的に過酷な条件でも、過労死するまで働き続けるのでしょうか？われわれの労働の状況は言いようもなく悲惨になっています…。将来に希望を持ち、不安なしに生活できる働き方が出来ないのはなぜなのか。このような過酷さを、多くの人々がやむをえないこととして受け入れているのはな

ぜなののでしょうか？

11月12日の神戸新聞に「ホームレス 定住型から移動型に」という見出しの記事が掲載されました。「神戸の冬を支える会」が7月に実施したホームレスの一斉調査(わたし達も調査の一部を担当しました)で、居住形態が変化したことがわかった、と書いています。同会は「社会の眼が厳しくなってテントや小屋が作りにくくなり、野宿者の生活がより不安定化した」と指摘しています。

野宿していない人の暮らしも追い詰められようとしている。野宿している人は、それに反抗させないための見せしめのような役割をになわされているのではないかと？

行政が「そこにはいけない」と居場所を奪う。それだけでなく、そのような場所にいるということ自体が、その人の非、許されないこと、犯罪であるかのように暗示する。それを受け、自分自身も

やりばのない不満を感じている若者達が、そのはけ口のように襲撃する。

襲われた人は、怪我や火傷をさせられ、不安と恐れと怒りを感じながら、より不安定な場所に移動したり、望んでいなくても施設に囲い込まれたりする。紹介した新聞記事に「定住型から移動型へ」などとかかかれると、ライフスタイルや住み方の好みが変わったかのように見えるが、生活、生存そのものが極めて不安定化させられたということに他ならない。一定の場所に居られないから、移動するしかないのだ。不安定ではあっても、何とか暮らしてきたが、その収入源が犯罪にされる。アルミ缶を集めると、資源ごみ持ち去りとして、犯罪人とされ、20万円もの罰金を科され、さらに追い詰められる。そのように追い詰められる人々を「居ては困る」「長居されて困る」とみなす。追い詰めることを正しいことと正当化する。わたし達の暮らし方や、感覚がこのような呪縛に捕らえられていることから、解放されなければならないと僕は思うのです。

\*注1 5ページ：野宿している人の人数の推移

\*注2 リーマンショックの後、派遣切りや派遣村が話題になり、派遣法が問題になったが、問題なのは派遣法だけではない。有期雇用の雇い止めなど、様々な非正規雇用が広がっている。日本経団連は「新時代の『日本的経営』」1995年5月で、期間の定めのない・昇給や年金のある雇用はごく一部にしようとしている。労働者の2/3は昇給もない有期雇用になりつつある。何時路頭に迷うかわからないのだ。

【参照】 <http://blog.goo.ne.jp/psyche-box/e/8bf6bcb88e63b725fc4423391a2d255a>

	「長期蓄積能力活用型グループ」	「高度専門能力活用型グループ」	「雇用柔軟型グループ」
雇用形態	期間の定めのない雇用契約	有期雇用契約	有期雇用契約
対象	管理職・総合職・技能部門の基幹職	専門部門 (企画、営業、研究開発等)	一般職 技能部門 販売部門
賃金	月給制か年俸制 職能給 昇給制度	年俸制 業績給 昇給無し	時間給制 職務給 昇給無し
賞与	定率+業績スライド	成果配分	定率
退職金 年金	ポイント制	なし	なし
昇進 昇格	役職昇進 職能資格昇進	業績評価	上位職務への転換
福祉 施策	生涯総合施策	生活援護施策	生活援護施策

\*註3 24・25 ページ:「市長への手紙」と「市長からの回答」

\*註4 26 ページ:「2-7 ビジュアル・いぢわる・インビジブル」

\*註5 栗の木とオリーブの木:かろうじて命を支えている収入源を奪ってしまう、空き缶条例制定の動きを見ていると、思い出すことがある。一つは、日本軍が第二次大戦中に中国でおこなった三光作戦(殺し尽くす・焼き尽くす・奪い尽くす)の報告書でみた写真。一面の切り株だけが写っている。その地域は栗が主産物だった。その栗の木を切りつくした後の写真だった。流血の惨劇ではないが、暮らしを出来なくする残酷さ。もう一つは「オリーブの木キャンペーン」パレスチナ YWCA が、東エルサレム YMCA と共に行っている、荒地に5万本のオリーブの木を植えるための募金活動。パレスチナの重要な産物オリーブの木をイスラエル軍が根こそぎにしたため荒地になってしまったのだ。僕も、3本の木を植えて貰ったが、また破壊されたとも聞く。生活の基盤を奪いつくすことの無残さはつながっている。

【参考】

<http://www.ywca.or.jp/whatwedo/palestina/olive.html>

### 【参考新聞記事 1:大阪・尼崎・各地で起こる襲撃】







2010年8月12日

市長への手紙

郵便番号 651-0068

住所 神戸市中央区旗塚通6-1-11

電話 078-261-3983

氏名 野々村 耀 (ののむらよう)

年齢 72歳 性別 男

僕は中央区在住の、72歳の、非課税の年金生活者です。クーラーもなく、熱中症が心配です。

先日、ある文化センターの一階のロビーのテーブルで、友人とエスペラントの本を読んでいた。わからないところについて話したりします。そこに館長という人がやってきて、「ここは憩いの場なので、勉強してはいけない」というので、「青少年コーナーでは、話し声は迷惑だろうから、ここで読んでいるのだ」というと、

「勉強するなら、料金を払って、貸し部屋を借りなさい」と言いました。そんなお金は無いというと、「料金を払っている人と、払っていない人が同じでは、不公平だ。税金を払っている人と払っていない人が同じでは不公平だ」というので。僕が、「私は非課税だ」というと、「どうして税金を払わないのだ」といわれました。収入が少ないので、課税されないといったのですが、払っていなければ、払っている人と対等では無いと言われたのには驚きました。誠に心外です。

さらに、「ホームレスが長いこといたので迷惑した」と言いました。そう言いながら他方で、「この地域は一人暮らしの老人が多いから、ここでゆっくり憩いの時を過ごしてほしい」といいました。家に住んでいる人はゆっくりしてくれ、ホームレスは来るな、というのです。人権感覚を疑わざるを得ません。そもそもどうしてある人がホームレスだと分かたり、そうでないと判断できたりするのか、そしてホームレスであったらどうしてそこにいてはいけないのか、私はホームレスだと申告をしなければいけないのか、外見で判ると思っているのでしょうか。大変驚くべき感覚に思えます。そしてそれが、神戸市立の文化センターの館長の言葉だということが驚きです。

また、先に述べた。税金を払った人と、税金を払っていない人が（と言っても消費税は払っているわけですが）同じでは不公平だということも驚きです。

そういう差別をするのが神戸市の方針なのでしょうか？ 僕の家にはクーラーがありません。ですから、少し涼しい場所で、友達と話しながら本を読みたかったのです。それが、そんなにいけないことでしょうか。

青少年コーナーは学生さんが勉強しているので、話しながら読むのは迷惑だろうと思って、ロビーにしたのでした。

館長と名乗った人は、ここで勉強すると、ほかの人もし始めるから、公平でなくなる、といていましたが、それなら、ここで人が憩えば、ほかの人も憩い始める、ということにならないでしょうか。

どう考えても納得がいかないのです、人権の問題として考えていただきたい。市長は、文化センター担当の部署、人権担当の部署はどのようにお考えでしょうか？

以前、神戸の冬を支える会の事務局を担当していた時、野宿せざるを得ない人の人権について(特に生活用品の撤去などに関して)市の総ての部局がそれぞれのかかわる場面で、人権尊重を前提に取り組むと約束したことを想起します。

先日朝日新聞で、クーラーを持たない貧しい人のために、公民館など公共の施設を熱中症に対する〔避難所〕にできないかという記事を見ました。神戸市ではそのような取りくみはされているのでしょうか。

これらについて、誠実にお答え下さい。

## 【市長からの回答】

神戸市広聴第 1350 号  
平成 22 年 8 月 20 日

野々村 謙 様

神戸市長 大田 立 郎

残暑の候、野々村様におかれましては益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。

さて、先に「市長への手紙」にてお寄せいただきました■■■文化センター利用時の職員  
の発言によって、不快な思いを抱かれる対応となりましたことを深くお詫び申し上げます。

神戸市の文化施設は様々な必要性に応じ、それぞれのお立場で、各施設をご利用いた  
くことを前提に設置しております。

従いまして、各施設の利用上のルールを守っていただきながら、また他の利用者のご迷  
惑とならない範囲でご利用、ご活用いただきたいというのが神戸市の方針です。

このたびのご利用においても、ご利用いただいておりますロビーが混み合い、他の利  
用希望者が利用できない、または利用しにくいという状態ではなかったと推測しており、  
そのことから職員の発言内容及び認識は誤ったものであると確信しております。

現在、■■■文化センターを含む「区民センター」等文化施設は、指定管理者制度の導入  
により、神戸市の指定した指定管理者により管理及び運営がなされているところです。

しかしながら、神戸市（公）の施設として、市民の皆様のご利用に関する方針及び考え  
方は変わるものではありません。

誤った人権意識、利用方法に対する認識につきましては、区民センターを管理運営する  
職員個人の問題ではなく、センターを運営する組織、神戸市の問題として指導・改善し、  
あわせて意識啓発に努めて参りたいと考えております。

また、今年の猛暑日が続く中、皆様のご健康の一環として、区民センターをはじめと  
する神戸市の施設をご利用いただく時間を設けられたり、同時に展示物をごらんいただ  
いたりすることにつきましては、個人のご判断にお任せするところではありますが、ご活  
用いただけたらと考えております。

この度は、誠に申し訳ございませんでした。

また、お気づきのことがございましたら、お聞かせいただけますようお願いいたします。

【担当】

市民参画推進局文化交誼部 078-322-6495

## 2-7 ビジュアル・いぢわる・インビジブル

井沼佑太・佐野歩・臺信一郎・中村祥規・鍋谷美子・野々村耀・山村麻里子

私たちはいつも何かに気づかないままに通りを歩き、公園を通り抜け、町並みをめでたりしています。

10年以上前のことですが、それまで行ったことのなかった灘区の一部を通った時、新しく建てられたモダンな家が並んでいるのに気づきました。初め綺麗な街に見えたのです。しかし、すぐにそこは、1995年の大震災で沢山の建物が崩壊し、焼失し、多くの人が圧死し焼死した場所だと思い至りました。そのとき、軽やかに明るく見えた町並みは、全く違って見えて来ました。

今の見かけは、そのうしろにあったことを覆い隠し、見えなくしています。以前の事を知っているものには、ここではこんなことがあった、その後、きれいに片づけられて、かつてあったことは見えなくなっている、と思えるのですが、以前を知らない人にとってはただ整頓された場所に見えます。

一緒に夜回りしていても、新しい人には「あったこと」が見えないので、一度一緒に「ここではこんなことがあった」ことを見てまわることを計画しました。

ここで紹介したことだけではありません。住まいのない人でなくても、雨が降ってきた時、雨をしのげる場所があれば助かります。横断歩道橋の階段の下などは、そういう便利な場所ですが、金網で囲んで入れなくされていることが多いのにお気づきでしょうか？

疲れたとき、空の雲が流れていくのを横になってただ眺めたいと思ったりしたとき、理由は何でもいいが、ごろっと横になりたいと思って、ベンチに近づいてみると、奇妙な仕切り金具があつて、寝られなくしてあるのを見ると、われわれの社会の底意地の悪さを感じませんか？

(野々村 耀)

### 【港の機械室の下】

港の機械室の下の空間に暮らしていた2人がいた。1人は糖尿病で入院し、もう1人は事情はわからないが帰ってこなくなった。その後、別の人が住みかけたが、われ我が気づいた時にはロープを張られ、「立ち入り禁止」と書かれた看板がつけられていた。現在は、その看板はずれロープに看板が取り付けられていた跡が残っている。入院した人の方は、かつて運送会社を経営していて、ここで暮らしていた頃も「また事業を興したい」とよく話していた。入院中に債務整理が終わったので、退院したのちアパートに移っていった。



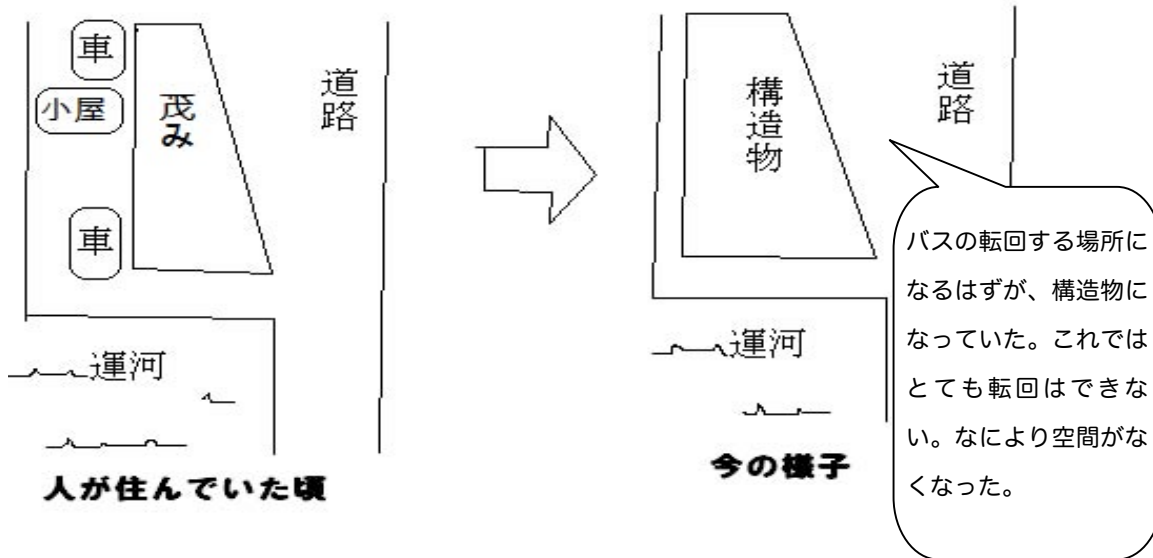
ロープを張られ、かつては「立入禁止」の看板が取り付けられていた。



## 【運河の横】



以前は小さな茂みの横に空間があり、そこに車や小屋で暮らしていた人がいた。酒蔵見学のバスが転回する場所にするという理由で追い立てられた。その人たちが住んでいた車や小屋は撤去され、その後、一带はフェンスで囲われた。しばらくして見に行くと、当初説明されていたバスの転回スペースとは全く異なり、写真のような構造物が出来上がっていた。



## 【A公園・B公園ベンチ】

A公園のベンチで暮らしていた人がいた。遊具とベンチの場所を入れ替える工事をすると言われ、一時その場所をどいた。工事が終わり戻ってみると、ベンチが短くされて寝られる長さはなかった（左下の写真）。



手すりの根元

そこでその人は B 公園に移った。しばらくそこで暮らしていたが、近隣の人とトラブルになり、地元の自治会がベンチの中央に仕切りをつけて寝られないようにしてしまった。現在は、手すりが折れて、根元だけが残っている（右上の写真）。

## 【橋の下の空間】



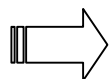
以前は水門の脇にはしごがあった。そこを上って奥の橋下の空間に入ることができ、その空間（右写真）に人が暮らしていた。橋脚や橋桁の補修工事があるのでどいてくれと言われ、1人はアパートへ、もう1人は施設へ移った。そして工事が終わって見に行ってみると、右下写真のように鉄のはしごが切断され、橋下の空間へ行けなくなっていた。



切断前は、このような鉄のはしごがついていた。

【Before】

【After】





## 【T川 A 橋下・B 橋桁と土手の間】

○ 公園にパンダが来るということで、○ 競技場前の広場が駐車場になり、広場に居た人たちが住む場所を追われ追われて、T川のA橋下に移動し暮らしていた（左下写真）。

現在は、遊歩道が狭くなりきれいに舗装されている。



しかし、遊歩道の工事をするということで追い出された。その時に、B橋の橋桁の隙間の下に移った人もいた。今度は、その橋桁下にある水道管の塗り替え工事をするということでどいてほしいと言われ、工事中（左下写真）だけだと思っていたら、塗り替えが終わった後は中に入れないようにブロック塀で囲いがされていた（右下写真）。

【工事中】



【工事後】



なかを覗いてみると、今も生活していた当時のものがそのまま残されている。



## 【C 公園東屋ベンチ】

野宿していた人が使っていたベンチがあった。その人がいなくなった後に、寝られないような金具がつけられた。



## 【橋横空き地】

ある橋横の空き地で、数人が各々の廃車で暮らしていた。側の橋げたの塗装工事をするため、資材置き場になりたいということで立ち退きを求められた。同時期に、子どもに石を投げられ窓ガラスが割れることがあった。さらに、側にマンションが建つので、その時もきつと立ち退きを求められるだろうと考え、少し離れた所の廃車に移っていった。その内の1人は犬を飼っていたが、移った先はアスファルトの照り返しが強くて犬が参ってしまい、知人に引き取ってもらうことになった。現在は、雑草が生い茂っており、人が住んでいた形跡はなくなってしまった。





## 【陸橋下隙間】



陸橋の付け根の隙間に風除けをつけて寝ている人がいた。その人は遠方に仕事に行っており休みの時に戻ってきていた。夜回りで会うことは少なかったが、時々帰ってきていた。しばらく夜回りを続けていたが、次第に人の居る気配がなくなった。ある時気が付くと人が入らないようにフェンスが設置されていた。

## 【歩道橋下】



歩道橋のスロープの下や橋脚の周りにテントを張って、4人くらいの方がここで暮らしていた。

工事があるということで、住んでいた人達は追い立てられて出された。その工事というのは、フェンスを張って入れなくすることだった。

## 【ある公園の東屋ベンチ】



ある人が生活用品をベンチに置いていたが、撤去するように言われた。その後、寝られないようにベンチに金具を取り付けられた。

## 【川沿いの公園】

ある公園を追い立てられた K さんが、近くに草も木もぼうぼうの使われていない空き地があったので、そこにテントを張った。すると間もなく神戸市の人が出てきて、出て行くように言われた。その後出入りにロープを張るなどして出入りできなくなってしまった。

しばらくして工事が行われ、写真のような現在の公園に整備された。見通しもよく、住めなくなった。





### 3 参加者感想

#### なぜ僕は夜回りをするのか

井沼 佑太

正直に言って、自分はこれといった挫折を経験してこなかった人間だと思う。世間一般と偏差値が示すところの「いい高校」、「いい大学」に入り、だれでもなんとなく社名を知っているような、「いい会社」に内定した。苦労や悩みはあっても、なんだかんだうまいことやってきた。貧乏も知らないし、他人から不当な扱いを受けたこともない。少なくとも今でもそれが心に暗い影を落とすなんていうほどには。学生生活は楽しい思い出の方が多い。

「一体何の自慢か」と思われるかもしれないし、「薄っぺらい人生だな」と思われるかもしれない。しかし、これが22歳現在の僕の人生の現状だと思う。

問題は、そんな世間の厳しさも知らない、ぬくぬくと生きてきた自分が、おそらくは全く違う境遇を経て野宿生活をしている方たちに、歩み寄ろうとするこの活動を行うとはどうとらえればいいのか、という点だ。

先日の夜回りで、普段は見かけない人が公園のベンチで寝ていた。僕より年長のメンバーと、公園で寝ていた男性の会話を、初めはうなずきながら聞いていたが、その内に不意に僕の方に話題がふられた。

男性：「君はこれが仕事なんか？」

自分：「いえ、なんというかまあ…」

男性：「ボランティアか？」

自分：「そういう感じです」

男性：「若いのにえらいなあ」

ボランティアです、と率直に言えなかったのは、なんとなく「いい気になるなよ」と思われてしまうかもしれない、という思いが一瞬頭をよぎったからだ。しかし僕の一抔の予感に反して、その男性は心底感

心して「えらいなあ」と言ってくださったように思えた。今思えば、心の中とはいえ、このような疑いを持ってしまったこと自体、とても失礼なことだった。そしてこんな短い会話の中でも、自分は相手のことを全く分かっていないのだなと感じた瞬間だった。

しかし、「いい気になるなよ」と思われるかもしれないと感じたのは、なぜなのだろう。自分の中に、「自分は善いことをしている。そんな自分がかっこいい」と思って活動に参加している自分がいるのだろうか。そしてそれを後ろめたいと思う自分も。

同じような不安感を抱く時がある。夜回りの活動を、ボランティアに全く興味がない人に話したりするときだ。なんとなく、自分がボランティアをしているということを話しやすい人と、話しにくい人がいる。後者の人に自分の活動を伝えようとするときの感覚が、公園で寝ていた男性と話すときにも出てきた。自らの行動が偽善と受け取られるのではという感覚。

自分が夜回り続けるのは、自らの勉強のためだと思う。メディアの教えてくれない、社会の裏側を知りたいから。そしてどんな状況にあっても、誇りというのか意地というのか、そういうものを持って生活している方たちから、教科書の字面を追うだけではリアルには伝わってこない、「人間の尊厳」の本質のようなものを感じるから。

しかしそれはそれで、そんな理由で夜回りをしていていいのかなという気持ちになる。というか、どんな気持ちからなら夜回りをしてよくて、どんな気持ちをもってするとだめ、なんて基準はどこにあるのだろうか。他のメンバーはどんな気持ちで夜回りをしているのだろうか。意外とこういう点は腹を割って自分の考えを話しにくい部分かもしれない。あるいは単にミーティングに参加できていないから、というだけかもしれないが…。

## 自己嫌悪と優劣について

臺信一郎

以前「灘チャレンジ」というまつりで、サークルの友達と野宿のことをテーマに風刺劇を上演したことがあった。この時の素直な感想は「自分は野宿のことについて全然分かってないな」ってことだった。夜回りを続けて、自分の中で「それはおかしい」と思っていること、普段会っている人たちの生きざまなどを伝えられたらと思っていただけ、いざ書くとすると理解不足のところが大きく、脚本執筆は全然進まなかった。

夜回りをしていてもいろんなことで落ち込んだり悩んだりする。コースリーダーをしてもうまく話せなかったり。扉をこっちから開けてしまって相手の人をびっくりさせてしまったこととか。真夜中に公園で寝ている人を見かけて、「声をかけないと」と思って起こしてしまったこともある。その人は不快そうだった。当然だ。真夜中に寝ているところを起こされたら誰だって嫌だろう。頭では分かっているのに。

夜回りが怖くなった。また何か失敗してしまうんじゃないか。相手の気分を害するようなことを言ったりしたりしてしまうのではないか。気をつけていても自分の話す言葉が信じられない。自分のしていることを信じられない。金縛りにあったみたいだった。こんな状態で夜回りを続けられるのだろうか。

自信のなさはミーティングなどでも影響していた。知識が無いこととかが理由で話についていけないことがよくあって、自分が惨めだった。ここにいてもいいのだろうかと思ってた。(その後一緒に活動している人がすごく励ましてくれて、ほんとうに嬉しかった)

自分に絶望してしまった。泣いて吹っ切れた気になっていた時もあるけど、絶望の波はまたやってくる。これじゃ夜回りを続けられなくなる。どうして自分を否定してしまうのか。向き合っただけの原因を考えないと。

一緒に夜回りをしている人たちのことはすごいな

って思ってる。だからこそ余計にダメな自分を意識してしまう。もがいてるうちにあるときハッとひらめいた。あーそっか優劣をつけて差別していたんだ。周りの人はすごい、優れてる。自分はダメな奴、劣ってる。そうやって自分と周りを比較して線引きしてた。「優劣をつける」っておれが一番嫌ってたことじゃなかったっけ？優れてるんじゃないやねえのに。劣ってるんじゃないやねえのに。おれらそんなんじゃないやねえのに。

気付いて終わりじゃない。これからだ。この社会の中では常にみんな評価され、比較され、それによって褒められたり貶されたりしてる。優れた人間になることを期待され、劣っていれば何かひどいことをされても仕方ないような雰囲気を感じる。嫌なこと、理不尽なことなんかを全部自分のせいにする(させられる)苦しさがっていろんなところにあふれてるんじゃないだろうか。それがなんでっていうのを考えたい。

知ること、考えること、感じること。真剣に向き合うことを通したい。今だっってもがいてる。もがき続けて何か見つけたい。

## 無題

中村 祥規

2010年の春、修士論文を提出した。夜回り準備会の活動で見聞きしたことやメンバーに聞かせてもらった話をもとに、「夜回り」活動の役割や位置づけについて論じた。内容的には不満だらけで、こんなものしか書けないのかと、自分の不勉強や能力のなさが呪わしかったが、ひとつの形にできたことは僕にとっては大きなことだった(もっとも、いろんな人の話を聞くと、論文あるいは文章というのは、そもそもそういうものらしい)。

論文を書いてみてあらためて感じたのは、「夜回り」活動が何を目的にしているのかというのは、考えれば考えるほど、よく分からないことが多いということだった。「支援活動」などと説明されることも多いけれど(そして、僕も論文では使いまくっているけど)、野宿している人が必要としている「支援」

からすれば、実際の活動はほんのささいなものでしかないわけで、かなりおこがましい感じがする。かといって、社会運動と呼ぶほど、はっきりとした政治的な目標があるわけでもない。

もちろん、「支援」や「運動」じゃないから意味がない、というものでもない。夜回り準備会でもふだんから言っているように、当事者が望まない、お仕着せの「支援」や「運動」なんて、迷惑以外の何ものでもないわけだ。

修士論文を書いてはっきりと自覚するようになったのは、「夜回り」のそのような曖昧模糊としたところだ。自分たちがしていること、やろうとしていることが、どこに向かっているのか。よく考えていないと、気が付いたときには、意図していなかったところに立たされていることになりかねない。自分の足元をよく見つめて、活動にかかわっていきたいと思う。

## 「被害者である」とはどういうことか

鍋谷美子

「被害者と付き合うということは、  
加害行為と付き合うということだ」

これは、「その後の不自由」という本の中に書かれている一言だ。知人に借りて読んでいたら、引き込まれて明け方まで読んでしまった。報告書編集作業はまだまだ途上なのに。。

その本は、薬物やアルコール依存症、DVや性暴力などのトラウマを抱えながら生きてきた女性たちと、その女性たちと付き合っている「支援者」と呼ばれる女性たちがつくったものだ。

宣伝には、こうある。

『普通の生活の“有り難さ”  
暴力などトラウマティックな事件があった“その後”も、  
専門家がやって来て去って行った“その後”も、

当事者たちの生は続く。しかし彼らはなぜ「日常」そのものにつまずいてしまうのか。なぜ援助者を振り回してしまうのか。そんな「不思議な人たち」の生態を、薬物依存の当事者が身を削って書き記した当事者研究の最前線！』

そこに出てくるのは女性ばかりなので、女性特有の生理研究などの視点もある。性暴力についても語られる。どれもこれまで男性権威者たちの視点からはこぼれ落ちていたものばかりで、それも重要だと思う。ただ一貫して語られているのは、日常をどう生きるか、ということで、私は自分にも、介助の仕事で出会うひとたちにも、夜回りや昼回り・病院訪問で出会うひとたちにも、通じるし、うんうん、となるし、ものすごく重要なことが書いてあると感じた。こんな息のしにくい社会で、「困っている」ひとには普段からそこら中で出会う。もちろんその中には自分もいる。いろんなひととつきあっていくときの、「なんで違うのか?」「なんで分かってくれないのか?」そういう違和感やもやもやについて解きほぐされた。

私が活動の現場で、セクハラ被害の当事者になったとき（今の社会では日常的に常に当事者であるとも思うが）、被害を訴えていく過程で、取り乱したり、うまく話せなかったり、攻撃的になっていたりしたことがあった。その経過を人前で話して整理する機会があって、自分が「被害者」という立場になって周りとかかかわると、コミュニケーションがむつかしくなってしまうのだと感じられた。まず、人に裏切られる行為をされているので、相手を信じられるかどうかという不安が大きい。信頼しようとして、少し期待を外れたことをされると、途端にショックが襲う。それを相手にもぶつけてしまう。その状態をうまく表しているのが、冒頭の一言だと思った。

野宿しているひとや、野宿状態ではないけれど、経済的なことを含めなんらかのかたちで困っていて、相談にくるひとたちにとっても、その相手を信頼していけるような関係をつくるのがむつかしくなっているのではないかと思う。そういう、関係をつく

ろうとする力を奪われたり削がれたりするという意味で「被害者」にされているのではないか。

ただ、もちろん「被害者」であることは、その人の人格を固定したりするものじゃない。「加害者」になることもあるし、加害・被害の構図だけではこぼれてしまうこともいっぱいある。それでも、たとえば一つの立場・状態に、一時的になったとしても、その人がなんでそういう振る舞いをするのか、その言葉をえらぶのか、分からないけど分かろうとすることはできる。少なくとも、私にはちょっと伝わってきた。私にもそういうときあるなあ、と思った。こういう分かった（ような気になる）瞬間がたまにあって、だからひととかかわり続けていきたいと思える。そこに希望があるんやなあと思って嬉しくなったのでした。

## 『一対一の関係作り』

西野 和

春～夏に4・5回参加させていただきました。その時は生活のことや、社会との関連とか、こういう状況を作る社会の仕組みやら、その人たちの心やらを考えてた気がします。が、今2月の時点で考えてることは『関係作り』についてなのでそこを書かせて頂きたいと思います。

理想の関係ってどんなんだろう？それは支援者やたまに回ってくる誰かなどではなく、なんでも話せる、相談もできる〇〇さんなんだろうな、と思います。2週間に一回、数分間ほどしか話さない関係であるけど、話している間はお互いが楽しい時間であってほしい。人とかかわるのは楽しいことも多いけどしんどいこともあるってわかってるんですが、でもやっぱりせつぱくなんだから楽しい会話ができればいいなって思います。そしてそれに加えて困ったときにいろんな相談できるような、安心できるような存在、それが理想なんだろうなと思います。

実際はどうなんだろう。相手がどう思っているかはわからないので置いておいて。そして私たちの側がどう思っているかは、ひとそれぞれなんだと思うけど。…私の場合、言い方が悪くて残念ですが、訪問先は所詮知らない人、××にいる人、と思ってます。表現が難しいんですが…。

確かに、実際夜回りに行つてなにかが起るとか、何か嫌なことがあるとか、そういうわけじゃない。でも、私は暗いところが嫌いです。顔の見えない関係が嫌いです。もしそこにいるのが知り合いであっても、嫌です。それに、何かを考えるときには「人なんて何考えてるかわかんない」という前提を持って考えてます。（常にそう思って人間不信で生きてるわけではないけど。）そういう自分の気持ちの中で、夜回りという活動をどうとらえるか。どう関係作りをすればいいのか。どういう気持ちで、接すればいいんだろうか。

深く考えずに、単純に皆さんのところを回って、楽しく話して帰ってくればいい。実際なにかあるわけじゃないんだから。そんなものなんだろうと思うんだけどそれは「暗いの嫌い」「暗いの怖い」とか思いながら話をする、活動に参加するのもどうかと思ったり…。

それに、相手の立場からしても私たちは複数でいってるわけですし威圧感とかあるのかとも思ったり思わなかったり…。どうやって安心できるような関係を作るか。どうやっていい関係を作るか。関係作りの難しさを感じます。

いろいろ考えましたが結局のところ、理想に完全に添えなくても、楽しい時間を共有したり、困ったときの相談をしたりはできる。できる範囲でそれをしていく、それに限ると思います。あれですね。距離の取り方って難しい。

## 出口より入り口

野々村 耀

神戸で夜回りを始めた頃、野宿する人がどんどん増えるのに、アパートなどに住んで生活保護を受け

ることの難しさに辟易していました。野宿している人が福祉事務所に相談すると、「あなたの状況なら、住むところがあれば（アパートでも借りたら）保護を受けられます」などといわれて驚いたことがあった。空腹で死にそうだと相談している人に、「ご飯を食べてから相談に来なさい」というようなものだからです。

で、つくづく思ったのは、「野宿になってから保護を受けるのは難しい」だから、「野宿になる前に保護を受けるのがよい」ということだった。福祉事務所や、地元の新聞などに、生活に困ったら、家賃が払えなかったら、野宿になる前に、保護申請しようというキャンペーンをしてほしいと訴えたが、取り合ってもらえなかった。

野宿からの出口は狭い。野宿になる入り口でとめられたら、問題は緩和されると思ったのです。

最近では、仕事を失って保護を受ける人が増えました。保護を受けるのが以前より、しやすくなった面もあります。すると、受ける人が増えた、予算が足りない、保護を厳しくしろ、などという声が大きくなってきました。

ここでも、生活保護を受けなくても暮らせるようになるのは、つまり仕事に就くのはたやすくありません。保護を受ける人を締め付けたって、解決しないのは明らかです。失業しないで、働き続けることが出来たら、保護を受ける必要もない。ここ何年か、企業も、経済団体も、そして国も、規制を緩和して、労働者を解雇しやすくする、いるときだけ使って、すぐ使い捨てにする、そういう方向を強化してきました。ここでも、保護への入り口【失業】をとめるべきです。

野宿したくない人が、しなくて済むためには、非正規雇用をなくしたり、簡単に解雇できなくしたり、要するに失業を減らす必要があります。悲惨な状態への入り口を広げながら、出なさいというのは意味がない。入り口についても考えないと、いくら夜回りしても……………。

と、一方で思いながら、今野宿している人が大丈夫だろうか心配なので、夜回りもしています。

## 立場が変わって…

山本（藤井）かえ子

昨年12月16日、岡山大学の一般教養講義「ボランティアの世界」で、夜回り準備会の活動について話をさせてもらった。これは、同大学の矢野正昭先生ご担当の授業で、矢野先生に誘っていただき、数年前から毎年参加しているものである。新潟在住になってもうすぐ2年、現場の活動に参加できていないので現状については話せないため、報告書の前号を持参し学生に読んでもらうことに代え、自分の体験談を中心に話を聞いてもらった。授業後、矢野先生から、アメリカに行った際に向こうの炊き出し活動に参加されたとのことで、体験談を聞かせてもらい、大変興味深かった。

昨年5月に娘を出産した。私たち親子は、今盛んに叫ばれている？“子育て支援活動”の「支援対象者」となったわけである。新潟市は子育て支援に力を入れているようで、子育て支援センターや電話相談、ショッピングセンター内の育児相談コーナーなど、いろいろな資源があり、ありがたい。

ただ、うがった見方かもしれないが、自分が「支援される存在」という枠に入れられて眼差されているようで、少し居心地が悪い。何となく、自分が社会の中で立場を弱められたような気がするのである。「受け身の姿勢」が体に定着してしまうような感じになる（幸い、新潟YWCAの社会問題研究会や新潟女性史研究会、ジェンダーゼミなど、子連れでもOKな場所への参加に恵まれ、「受け身の姿勢」の定着が少し和らぐのではないと思うが）。

出会う「支援者さん」たちはとても親切なのだが、相手のことを知るよりも自分をさらけ出すことばかりが続くと、苦痛になってしまう。そうかといって、常に「対等に」話をしようとするれば、とても時間がかかる。それに、「支援対象者」側から相手について尋ねることはしにくいものだとすることを、身をも

って実感した。

野宿する人たちは、私よりも「支援される存在」という枠で眼差される機会が多く、きついものであるだろう。逆に、「支援される存在」と眼差されるだけ、社会に包摂された存在としてみなされることになるため、排除よりも「よい」と言えるのかもしれないが…。

夜回り活動に参加していたとき、出会いの非対等性について悩んだ。今も、そのことについていろいろ考えさせられている。

といわれていることに対する疑問を、私に持たせてくれるようになりました。日々の生活のなかで野宿している人に対する偏見はまだまだ感じます。今度は、自分が知っていることをもっとまわりに伝えていきたいと思っています。もちろん夜回りに継続的に参加して、野宿している人の現状をちゃんと知ったり、なにかの一助になれたらいいのですが、なかなか参加できずにいて申し訳ないです。また夜回りに参加させていただけたらなと思います。

## 夜回り感想

吉村美香

初めて夜回りに参加してからもうすぐ3年です。今年度は全くといっていいほど参加できず、最近の状況といったところはよく分からないのですが、最近思うところを書かせていただこうと思います。

大げさかもしれませんが、これまで生きてきて、夜回りと夜回りで出会う人のことを知ったときほど、自分の考え方が影響を受けたことはないと思います。自分は偏見をもっていないつもりでしたが、実際、自分は偏見のかたまりだと思いました。また、「日本は豊かな良い国、貧困はない」というのも自分の境遇だけを根拠にした思い込みだったんだと気が付きました。「貧困」といえばアジアやアフリカの貧しい子どもたちというイメージがありましたが、貧困には色々あって、むしろ身近に大きな貧困があるのだと気付かされました。「日本は良い社会だ」とは思うのですが、完ぺきに良いのではないし、むしろ貧困を放置しているような、悪い部分もいっぱいあると考えるようになったと思います。大学でも、「実は日本は自由な国ではない」というようなことをテーマにゼミで発表したのですが、そういうテーマにたどり着いたのも、夜回りによる部分が大きいかなと思います。

夜回りで経験させてもらうことは、まわりで「普通」



# 就職活動と夜回りとの狭間で感じたこと

佐野歩

私は、今年一年就職活動を経験した。その中で、夜回りとの関係で自分が感じたこと思ったことを書いてみようと思う。

私の就職活動は順調とは言い難かった。民間も数社受けて、落ち続け、公務員試験でも面接で苦戦を強いられていた。そうした状況の中、私は焦った。私を焦らせていたものは、「就職できなければ、一生貧しい生活をしなければならぬかもしれない。野宿に至ってしまうかもしれない。そんなのは嫌だ。」という思いだった。夜回りをしたり、貧困問題について考えたりしながら、そうした状態に否定的な感情を抱き、そうした状態になることから必死に逃げようとする自分がいた。そのような自分がいるということは、自分の中で「野宿している人々、ワーキングプアの人々は、不幸なんだ。哀れな存在だ。かわいそうな人たちなんだ。」という考えがあるということである。そのような考えを持っている自分に気づき、愕然とした。愕然としたからと言って、何かが変わったわけではない。相変わらず私は、「自分は、ちゃんと職について幸せになりたい。」と思い続けていた。しかし、葛藤は常にあった。そんな事を思ってしまう自分。そんなことを思いながら、夜回りに参加し続けている自分。「最低だ。自分。」と思った。

ただただ、思い続けていた。

それだけである。この経験から、何かを得た、とか、この葛藤からどのようにして逃げ出したか、とかを普通ならこの後を書くものなのかもしれないが、私にそんなことはちっとも起こらなかった。葛藤があって、就職が決まって、そんな葛藤があったことすら次第に薄れていくんだろうなあ。そう思うから、自分のありのままをこうして残しておきたいと思う。

就職が決まってからのことを。「幸いなことに」私は、公務員として就職が決まった。そうしてから、ふしぎなことに、というか当然のことに、というか、私が「野宿者問題・貧困問題」に対して抱いていた情熱・切実さが薄らいできてしまった。こうした問題をどうでもいいと思うようになった、ということでは決してない。しかし、「自分はなりたくない。だけど、もしかしたら自分もなってしまうかもしれない。だから、誰でもなりうるかもしれない問題として何とかしなきゃ。」という、ある種の潜在的当事者という立場からみた切実さがなくなってしまったのである。他人事の問題になってしまった。だからといって、これらの問題を自分のこととして考えるために、公務員としての就職をやめるつもりもないし覚悟もない。こうした問題にライフワークとして携わっている方々に対してはとてもしつこい話だとは思いますが、ここまで言うてしまうと、「一体、お前のしてきたことは何だったんだ？」という話になるかもしれない。しかし私は、公務員になっても、大企業に勤めても生涯安泰ではないということを知った。いつか、病気を患うかもしれないし、辞職に追い込まれてしまうかもしれない。そうした可能性をたぶん、「夜回りをしていない自分」よりは少しだけ、本当に起こりうるかもしれないこととして考えていると思う。少しだけ、野宿問題・貧困問題を自分のこととして考えていると思う。本当に少しだけだが。

ここまで、暗くて仕方がない話ばかりだったので、最後に楽観的観測を一つだけ。もっとももっとも、多くの人が野宿の問題とか、貧困の問題とかを少しだけ自分のこととして考えるようになったら、今の状況は何か変わるんじゃないかなあと思う今日この頃である。

## 【巻末付録：夜回り準備会年表】

1995.1.17	阪神・淡路大震災  公園の被災者救援活動の中で、野宿している人に出会う。
1995 秋	「神戸の冬を支える会」(※)の発足。神戸YWCA救援センターも構成団体に加わる。
1995-96 冬	「神戸の冬を支える会」が三宮・東遊園地で「冬の家」を開設。以降、越冬活動として毎年行なわれるようになる。
1996.2	中央区(生田川以東)・灘区で夜回りを行う。  月1回ぐらいのペースで夜回りを行う。東灘区を活動範囲に加える。
1998.4	「夜回り準備会」が発足(救援センターの解散による)。 このころ、月2回の夜回りと月1回のミーティングが定着。  病院訪問、昼回りを始める
2001.6	「灘チャレンジ」(※)に出展(～2008年)
2003.2	「神戸大学ボランティア講座」を受け入れ(～2009年)
2004.7-11	連続講演会『「ホームレス」をめぐる4つの話』を開催
2005.10	「活動報告書」第1号を発行(2009年までに5冊が既刊)
2006	神戸市の「シルバーカレッジ」講師に招かれる(～2007年)
2007.6	「夜中回り」を実施する(～2009年4月)
現在	「夜回り」、「病院訪問」を中心に活動。

※「神戸の冬を支える会」: 震災後、野宿している人の支援に取り組んできた団体による連絡会議として発足。現在は、NPO法人になっている。

※「灘チャレンジ」: 神戸大の学生を中心に運営されている地域のお祭り。

# 神戸YWCA夜回り準備会 2009年度会計報告

(自：2009年4月1日～至：2010年3月31日)

【収入】

【支出】

(単位：円)

項目	金額	備考	項目	金額	備考
寄附金	288,900	55件	物品費	85,637	炊き出し食材費(越冬)・下着・蚊取り線香・カイロ・医薬品・コーヒー等
助成金	369,280	NHK歳末たすけあい義援金110,000円 /兵庫県社会福祉協議会(県民ボランティア活動助成)30,000円/しみん基金 KOBE助成金 229,280円	備品消耗品費	113,500	会議資料費(コピー代等)・パソコン・周辺機器・かご等
活動報告書頒布	1,800		車両費	64,040	燃料費・車両賃借費・駐車料等
謝金	30,000	神戸大学ボランティア講座実習受け入れ	印刷製本費	114,712	活動報告書印刷費
			通信費	21,696	報告書発送費・振込手数料等
			新聞図書費	7,000	
			支払寄附金	50,000	神戸・冬の家の越冬活動に協賛
			管理費	233,395	分室維持管理費、人件費等
合計	689,980		合計	689,980	

## 寄附・寄贈報告

(自：2009年12月1日～至：2011年1月31日、敬称略)

東昌宏 飯濱玲子 井沼佑太 井上みち子 伊吹三樹雄 岩切幸子 岩崎滋 大久保生子 大原宏志  
岡田有生 川辺比呂子 北野和歌子 金永治 小泉浩 小谷美智子 後藤安子 齋木彰 佐藤きよ子  
塩田達史 志賀文哉 清水純子 上智大学社会正義研究所 住田サーラ 武田多美 田花安子  
鄭秀珠・下田隆清・由楽 津田昌夫 寺内真子 中山茂 長澤毅 西島明子 西山秀樹 二宮百合子  
日本基督教団神戸栄光教会社会委員会(柳澤豊さん経由) 野々村耀 濱西栄司 林祐介 原口剛  
平山理 藤井(山本)かえ子 牧野哲 三島孝子 宮田泰子 森崎武雄 矢野啓子 吉田英三

金銭面、物資の形で多くの御寄附、御寄贈をいただきました。ありがとうございました。

また、第4土曜の夜回り前にお握りを握ってくれている山本容子さん、宮地京子さん、いつもありがとうございます。

万が一お名前の漏れや記載間違い等ございましたら、当会へご一報いただくと幸いです。

【編集後記】 人がいない！夜回り先にも回る側にも！というわけで、このところ少数精鋭？でまわっていて、人力がすべてなので、切実に人手がほしいと思う今日この頃。ただ、こういう活動に参加するにも就職すると時間がない、失業しているから参加できる、という、まさに社会状況をものすごく反映している人がぞくぞくです。夜回りスタイルもこれでいいのか、と悩みながら、今号はみんなのいろいろな思いがそのまま表れている報告書になったんじゃないかと思えます。活動とともに、大事にしている報告書作り。スローペースですが、なんとかつなげて出していきたいと思っています。ぜひ感想などお寄せください。(なべたに)

※今号の報告書は、「22年度NHK歳末助け合い義援金」の助成を受けてつくりました。



---

神戸YWCA 夜回り準備会 活動報告書 Vol.6

2011年3月1日発行

編集 井沼佑太・佐野歩・臺信一郎・中村祥規・鍋谷美子・野々村耀・山村麻里子

発行 神戸YWCA 夜回り準備会（仮）

【神戸YWCA 本館】 〒651-0093 神戸市中央区二宮町1-12-10

TEL：078-231-6201 FAX：078-231-6692

【神戸YWCA 分室】 〒651-0062 神戸市中央区坂口通5-2-16 神戸YWCA 分室

TEL&FAX：078-221-5111

【E-mail】 yomawari@kobe.ywca.or.jp 【URL】 <http://www.kobe.ywca.or.jp/NOJUKU/nojuku.html>

【郵便振替】 01100-0-10298 名義：神戸基督教女子青年会

【銀行口座】 三井住友銀行 三宮支店（普）1015232 名義：（財）神戸YWCA

※夜回り準備会へのご寄付は、郵便振替用紙にその旨明記するか、上記連絡先にご一報ください。

**《参加者募集しています！》夜回りや病院訪問などに参加したいという方は、上の連絡先までご連絡ください。**